

やはり俺が魔道士になれたのは間違いなかった

カロマ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

おはようございます！こんにちは！こんばんは！

トリニティセブンと俺ガイルのクロスオーバーが無かったのでやってみようと思います。

初投稿なのでお手柔らかにお願いします。

俺ガイル側の時系列は奉仕部入る前にします。

目次

これが俺の魔道

俺が魔道士になれる…？ | 1

俺が魔道士になれる…？② | 6

俺が魔道士になれる…？③ | 10

俺が魔道士になれる…？④ | 20

俺が魔道士になれる…？⑤ | 29

俺が魔道士になれる…？終 | 39

ビブリア学園を去って…

俺は——を指す | 51

俺は——を指す② | 60

俺は——を指す 終 | 72

これから

帰ってきてこれかよ… | 84

ねえ…？なんでそんなに働かせるの？ | 91

これが俺の魔道
俺が魔道士になれる…？

あの日俺だけは…生きていた。

〔数日前〕

比企谷八幡 side

俺は4月から高2になる…と言っても入学当初事故にあつたおかげでぼっちのまんまである。

まあそんな事は置いておいて…

今は近くのシヨツピングモールに来ている、ぼっちで。

理由としてはキツくなつて使えなくなつた上履きの買い替えと

……まあ色々だな。

とりあえずさっさと買つて帰りますか…

〔1時間後〕

買い終わつて今は帰り道、正直なところ早く帰つて買った本を読みたい。

なんでか分からんが本屋に入って物凄く気になつてしまい買つてしまつた…もしかして…あつだめだこれは再発する恐れがある。

これ以上考へては駄目だ、街中で技名叫ぶとかめちやくちや恥ずかしーじゃねーか。

よし、とりあえず学校始まつたらベストプレイスで読むか。

おつと…そんな事考へていたら家に着いてしまつた。

とりあえず入るか

八幡「ただいまー」

確か小町は居たはず。

小町「お兄ちゃんお帰りー、アイス買つてきてくれたー？」

八幡「おう、ほらよ」

小町「ありがとー！愛してる！あつ…今の小町的にポイント高い

」

八幡「おう、じゃあ俺寝むいから寝てくるわ」
なんでか分からんが眠くなってきた、さつさと寝よう。

ーそれから数日がたち、いつも通りの日常にー

あれからどうも気分が優れない
既に学校は始まっているのに…

平塚先生に呼ばれていたので職員室に行く、早く帰りたいたからとりあえず持ち物持って行くか。

平塚「…：…ひ…：…や！比企谷聞いているのか！」

八幡「あ…：すいません、どうも最近体調悪くって…」

平塚「そうか…：それならば早く帰った方がいい、顔色が悪いからな、
また明日体調が良くなっていたら放課後に職員室に来るように」

八幡「はい、ありがとうございます…：失礼しました」

良かった…：なんか厄介事押し付けられそうな予感したから体調悪くて本当に良かった…：…あ、やばい…：倒れる…

それからしばらくして起きたようだ、まじかよ…：倒れてたのに気付かれないとかステルスヒツキー凄すぎね？

そんな事を考えながら目を開けてみると…

八幡「…：は？」

何もかも壊れていて周りには人がいない世界になっていた

八幡「状況がよく掴めん…：とりあえず持つてる物は…」

筆記用具と教科書類とスマホと…なんでこの本光ってんだ？

スクールバッグの中にはこの前買っておいた謎の本が光っていた

八幡「とりあえず触ってみるか…」

本を手を取った瞬間…

???「…あつ…やつと出れました！」

本が美少女に変身した

八幡「……は？」

いやいやいや…！まじで意味わからん！

え？なに？ついに俺変な夢見てんの？

???「…別に変な夢見てないですよ…？」

な、なるほど…夢ってすごいなあ…すごいなあ

???「…だから！夢じゃありません…!!」

思いつきり両頬を叩かれた

八幡「痛てえ…夢じゃない…まじか…」

???「はい！まじです！そう言えば貴方の…いえ、マスターの名前は

？」

え…なんかマスターとか言われてんだけど…こっわ。

とりあえずここは…

八幡「人に名前を聞く時はまず自分からだろ？」

???「あ…すみません！私はカルマリア…カルマリアの写本です！」

お…おおう…なんか変な名前だな

八幡「お、俺は比企谷八幡だ…それとさっき言ってたマスターっ

てのはなんだ？俺の事じゃないよな？」

カルマリアの写本「いえ、マスター、私はマスターの魔力に反応し

て機能する事ができました、よってこれより比企谷八幡様…貴方は私

のマスターです」

や、やばい…頭パンクしそう…とりあえずマスターって呼ばれるの

むず痒いから辞めてもらおう…

八幡「あ…うん、OK…とりあえずマスターって呼ぶの辞めてく

れ、なんかむず痒い」

カルマリアの写本「そうですか…それなら八幡様とお呼びさせてい

たきますすね」

カルマリアの写本「それと…カルマリアの写本だと長いので…何か名前を付けてもらってもよろしいでしょうか…？」

押してダメそうだから諦めろだな…とりあえずは名前決めか…

八幡「名前ねえ…：ハルア…：ハルアでいいか？」

カルマリアの写本「…はい！ありがとうございます…！これからはハルアとお呼びください！」

良い笑顔だな…嬉しいもんなのか？

八幡「おう」

八幡「とりあえず聞きたいことが山ほどある、1つとしてこの状況がどう言った物か分かるか？」

ハルア「そうですね…：これは崩壊現象と言った物でしょう」

八幡「なるほど…」

崩壊現象って物騒な名前だな…いや、充分物騒だわ！

八幡「それで俺が生きてる理由は？」

ハルア「そうですね…：私がいたからです、八幡様の魔力を何かあった時のためにずっと吸っていたのでそれで一時的に防いで八幡様を守らせていただきました」

俺が体調悪かった理由はそれか…いや、ちよつと待てよ？

既に仮契約みたいなものができてたってことは…：いつでも出てこられたってことだよな？おかしくないか？

八幡「いや、ちよつとおかしくないか？それなら何故今まで出てこなかった？」

ハルア「状況判断で今出ではダメだと思ったんです、家にも妹様も居ましたので驚かせてしまうと…：それでさつきいきなりこの辺りがいきなりおかしくなり、崩壊現象を察知したので私達を守るような形で術式を展開してこの様です…：この辺り一帯を囲む術式もしたかったのですが魔力が足りなくて…：って感じですかね」

八幡「なるほど…：状況は何となく理解できた…：それじゃあ魔力が察知された方が分かるならそっち行くか、生きてるやついるかもしれないしな、正直分かる人居た方がいい」

ハルア「なるほどです、では私についてきてください」

そう言いハルアが歩き出したので後をついて行く…

八幡「はあ…まあとりあえずよろしくな、ハルア」

ハルア「…はい！」

おお…良い笑顔

これからどうなる事やら…

俺が魔道士になれる…？②

今はハルアと歩いている時に気になった事を聞いてみる

八幡「なあ、魔力とか言ってたがそれは魔法使いとか魔導士見たいな認識でいいんだよな？」

ハルア「はい、魔道士ですね…」

八幡「何か違うのか？」

ハルア「はい、違うのですが…説明すると長くなってしまうのでまた今度でよろしいでしょうか？」

八幡「ああ、それで構わない」

八幡「後は…そう言えばなんで魔道書であるハルアが売られてたんだ？」

ハルア「…た、旅みたいなものですかね…」

八幡「なるほど…本として彷徨ってたらなぜかいつの間にか売られてたわけか…プツ」

ハルア「しよ、しようがないじゃないですか！人前に出たら面倒な事になりますし…そ、そんな事より！八幡様は魔道士になられるんですか？私がいいますからなろうと思えばなれるんですが…」

強引に話逸らしやがった…

八幡「そうだな…やる事ないしやってみるのも一興かもな、どんな物なんだ？」

ハルア「そうですね…大雑把に説明すると…私達魔導書などで七つの罪に属する「傲慢」「嫉妬」「憤怒」「怠惰」「強欲」「暴食」「色欲」なるものの内の一つに分類するどれかのテーマを決めてって感じですかね」

八幡「ほー、それから先は勉強しましょうって事だろ？」

ハルア「はい、そうですね」

八幡「じゃあまず1つの目的は魔道士の勉強？って事で」

ハルア「了解致しました」

しばらく歩いていると

八幡「おい、なんかあそこの学校だけ綺麗じゃねえか？」

ハルア「そうでございますね…きつとあそこに誰かいます、複数…
いえ、2人と魔道書一つと言ったところでしょうか」

八幡「よく分かるな…って事は生徒っぽい魔道で作られたもの
か」

ハルア「よく分かりましたね…流石です」

八幡「まあ人間観察ばかりしてたぼっちだからな…フヒツ」

ハルア「と、とりあえず中に入りましょうか」

笑ったら若干引かれたんだが…いや？シヨックじゃないよ？

それから少しして屋上の扉の前に来て

「はっはっは!!こりややられたぜ!!」

「そりやそうか、こりやとんだ盲点だったぜ」

「聖が「だぜ」っ娘に…」

聖? 「今流行りの誘い受け男子じゃなかったんだなお前!!」

ギョオン

聖? 「おいおい…いきなりずいぶんご挨拶だな魔道士!!」

「やっとう招待を表しましたね改竄者!!」

「リリース…!」

リリース「…いきなり呼び捨てですか、本当に失礼な人ですね」

「いやっ…それよりもなんなんだよその格好は!?!ずいぶんと物騒

すぎるだろ!!」

リリース「?見ての通り魔道士の戦闘スタイルですが…?」

「せつ…戦闘スタイル!?魔道士!?なんだよそれ!」

聖? 「…お前も薄々気づいてはいるんだろ?」

パチンツ

聖? 「これが元々のお前の住んでた世界だ」

聖? って子が指を鳴らした瞬間……ドンツ

八幡「いっつつ……いきなり何しやがる……」

あ、ちなみにハルアは念の為魔道書になってもらってる

聖? 「誰だお前?」

リリス「…何者ですか!？」

八幡「いやあ…怪しいもんじやないんで…邪魔してすみませんでしたア!!」

フツ…決まったぜ…俺の渾身の土下座が

リリス「と、とりあえず頭を上げて立ってください」

聖? 「そ、そうだな…話が進まねえぜ」

八幡「あ、ありがとうございます?」

八幡「ま、まあとりあえず話し終わるまで静かにしてるわ」

聖? 「あ、ああ…そうしてくれると助かるぜ…」

リリス「…そ、そうですね」

リリス「コホン…三日前です、この地域一帯で大規模の重力振動が観測されました」

リリス「原因は分かりませんが、我々は 崩壊現象 と呼んでいます
が——1つだけ分かっていることはこの街1つが一夜にして飲

み込まれたということです」

??? 「ぐっ……」

聖? 「……思い出したか」

??? 「俺が……創った……?」

聖? 「そうだ、私はお前の願いを叶えるよう言われたからな、ビツグな魔術を使ったわけよ…しかしそれがこんな子供の絵で足がつくとはな…どんだけシスコンだよ!」

聖? 「まあお前が持つてりやそりや私の世界構築の影響は受けないよな」

リリス「私もさすがに驚きました…私はこの崩壊現象を調査するため学園から派遣された魔道士、でも着いてみたら何も無いはずの場所にあるはずのない街1つが出来上がっていたんですもの」

…やっぱり学ぶシステムとかはあるのか、まあぼっちだから気にすることではないか

聖? 「はっ!!それくらい私にかかれば朝飯前だぜ」

リリス「……危険な魔道書、もし失敗すればさらに崩壊現象を拡げてしまうことになる」

リリス「それに世界をもう1つ創り上げてしまうなんて……どう考えてもおかしい——そんな事並の魔道書では到底不可能です……選択しなさい春日アラタ、1つは今すぐこの創られた世界を魔道書に解除させること、そうすればそのまま平和に生きられることを約束しましょう、ただし魔道書はこちらで処分し春日聖らの記憶は全て消去させてもらいます……そしてもう1つ——魔道書を渡さないのであればここで死んでもらう、何よりこの世界を創るよう願ったのは他でもないあなたなのだから」

すっごい中二病っぽいけどツツコンだら殺されそう…怖いよお…
フツ

アラタ「ははは……なんだよ……ってことはあれだ、生きていたけりやみんな忘れろって……そういうことかよ!!」

アラタ「みんなも——聖も——聖……!?!なありリス!!聖は……聖は生きているのか!?!」

リリス「そっ……それは……」

聖? 「生きてるぜ」

アラタ「お前……」

聖? 「私のこの姿はあの娘の影の投影だからな、時空の狭間……この世界のどこか、もしくは過去か未来か……とにかくどこかで生きているのは間違いないぜ」

アラタ「聖が生きてる……そうか……決めたよ、魔道書は渡さない」

リリス「えっ……あなた……」

アラタ「だけど俺も死にやしない、第3の選択肢だ!!」

八幡「あ、あの……格好つけてるところ申し訳ないんですが俺はどうすれば?」

3人「あっ……」

あ、忘れられてたのね…悲しくないよ?

俺が魔道士になれる…？③

アラタ「ずいぶんと田舎にあるんだな、魔道学園ってのは」

八幡「そーだな」

俺こと比企谷八幡はめでたく入学？いや、転校できました
ポッチライフ満喫できるといいなあ。

ー1日前ー

聖？「そう言えば…お前なんで生きてるんだ？」

リリス「確かに…崩壊現象に巻き込まれているので生きてるのは
不可解なのですが、説明してくださいますよね？」

これは説明を要求って言うよりしなきゃいけない状況なんだよな
…まあとつちにしろ説明するつもりだったからいいんだが…

八幡「あー…とりあえず説明頼む、ハルア」

そう言うのとハルアが人型になる

ハルア「…はい、分かりました…私はカルマリアの写本…名前
はハルアと申します、よろしくお願いします」

ハルアがそう言いながら綺麗なお辞儀をする

聖？「お前は…なんなんだ？」

ハルア「そうですね…簡単に言うのと彷徨ってたらその比企谷八
幡様…八幡様の所有物になったと言う認識でいいと思います」

リリス「…そうですね…それでは説明をよろしくお願いします
…」

ハルア「はい…まずは——」

それから数十分して説明が終わり

ハルア「つて感じです」

聖？「…まさにイレギュラーだな」

八幡「そうなのか…？とりあえず俺としてはさつき言ってた学園つてところに入学したいんだが…」

リリス「…そうですね…多分学園長がいいと言うので平気だと思いますが…」

リリス「まずはここに居る皆は初対面です、軽く自己紹介しませんか？」

聖？「…ああ、そうだな…私はアステイルの写本だ」

アラタ「…俺は春日アラタ、よろしくな」

リリス「…私は浅見リリスといます」

ハルア「私は…さつき言ったのでいいですね」

『……………』

全員が俺に視線を向ける……………あ、俺の番か

八幡「俺は…比企谷八幡、よろしく？」

そして今に至る

アラタ「お前はほんつと…無愛想って言うかテンションひつくいな…」

八幡「そうか？こんなもんだろ…お前らリア充が高すぎるだけだ」

アラタ「とりあえず入ろうぜ」

八幡「ああ…」

??? 「号外——号外ですよーっ」

なんか配ってんな……………てか元気よすぎね？

??? 「なんとこの学園に転校生が2人も!!やってきます!!」

??? 「噂じゃ1人はおっかない能力の持ち主で力は魔王に匹敵すると

か!!もう1人の詳細は詳しくわかりませーん!!」

なんか安心した、目立たなそうで良かった

??? 「わぷっ!？」

春日にぶつかつてる……ちゃんと前見ようね。

アラタ「それは凄そうな奴だな……」

八幡「おい……それお前だぞ」

??? 「きやわー!?! 転校生!?!」

そして少しして教室にて

リリス「というわけで転校生の春日アラタさんと、比企谷八幡さんです」

アラタ「……お前せんせいだったんだ？」

リリス「こういう時はまず皆さんに挨拶してからにしてください、それに「お前」ではなくリリスです……本当に失礼な男ですね……」

アラタ「それもそっか……」

挨拶は社会人として当然だぞ春日よ……

??? 「はいはい！質問ですっ!!」

??? 「はいセリナさんどうぞ」

朝の元気な子か

セリナ「お二人の好みの女性はどんなんですか？」

アラタ「胸のでかい人だな」フツ

セリナ「うわっ、直球だ」

アラタ「まあなくても愛せると思うが」

セリナ「しかも微妙なフォローきた!!」

アラタ「後は顔が良ければいいよ」

八幡「俺は養ってくれる人なら誰でも」フヒッ

セリナ「ぶっちゃけ二人とも女の敵ですね、了解しました」

え？なんか悪い事言った？めっちゃいいじゃん……養ってくれる人。

リリス「コホンッ……気が済みましたか？では——」

セリナ「アラタさんは魔王クラスにしかできない世界構築をしたって本当ですか？」

アラタ「ああ……あれくらい誰でもできるんじゃないの？」

リリス「ちよっ……アラタ!?!」

「おお——!!本物だー!!」「魔王候補キタ——!!」
矛先が全て春日に向かったな、これで安心して静かにできる……

放課後になり学長室で

学園長「あははははっ!いきなり初日から魔王呼ばわりとはね」

リリース「笑い事じゃありません学園長!!今日は授業にならなかつたんですからっ!!」

アラタ「何か凄そうでいいじゃないか」

リリース「あなたは八幡さんを見習って黙っててくださいっ!!」

いや:君達がテンション高すぎるだけです:浅見さん:

学園長「はっはっは!!あ——面白かった!!さて……初めまして春日アラタに比企谷八幡!学園を代表してキミを歓迎するよ……ここ王立ビブリア学園はご存知の通り魔道士を育成する超秘密組織だ」
アラタ「おお……秘密組織……」

確かに中二心をくすぐるよな、再発しそうで怖いわ……!

学園長「各国政府からの資金提供を受け——極秘裏に様々な未解決事件や魔道的と思われる不可思議な事件を調査・解決するのが魔道士——別名　メイガス　というわけさ」

2人「メイガス……」

アラタ「そいつになれば黒い月に飲み込まれた聖も取り返せるんだよな?」

学園長「さあ……それはどうだろうね?魔道すべての可能性を否定しない、つまりできるか否かはキミ次第ってわけさ」

アラタ「……近道ってねーの?」

リリース「どんな道にも近道なんてものはありませんっ、日々の努力と鍛錬が道を作るのです」

アラタ「なるほど……でもすべての可能性があるなら近道だってあるんじゃないの?」

リリース「うぐっ……そっ……それは……」

おい:先生が言い負かされてるんじゃないやせんっ!!

学園長「はっはっは!!うん:確かにその通りだね」

リリス「学園長、面白がらないでください!!」

学園長「いいじゃないか…あながち間違っていないんだし…ま…近道ってことじゃないがこの学園には7人のボスキャラみたいなたちがいてね」

アラタ「ボスキャラ?」

7人…:…って事は

八幡「7つの罪の何かをできた人達がいるってことですよね?」

学園長「…:…ビンゴだ!トリニティセブン——そう呼ばれる各分野の頂点を極める7人の魔道士の女の子たちさ——ちなみにリリスちゃんもその1人でね」

アラタ「そうなのか…:…確かにスタイルもいいしな」

八幡「いや…:…スタイルは関係ないだろ」

リリス「そつ、そうです!…:…スタイルは関係ないですつ!?!」

学園長「そんなわけでそのトリニティセブンの娘らと知り合い、戦ったり手込めにしたりすれば魔道士のなんたるかが手っ取り早くわかるかもね?」

リリス「手込めつ!?!」

アラタ「なるほどな」

アラタ「アラタも納得しないでください」

スパアアン

いい音の入ったなあ…:…てかこの3人で漫才やったら売れんじゃねーの?知らんけど

学園長「とまあそんなわけで——リリスちゃんのことよろしく頼むよアラタ君」

アラタ「不束者ですがよろしくお願ひします」

リリス「二人ともいい加減にしてくださいっ!!」

学園長「まあいいじゃないか、ちよつとしたジョークだよ、なあアラタ君?」

アラタ「そうだそうだ、冗談が通じない奴はこれだから」

リリス「意気投合してるーっ!?!」

これ俺完全に空気だったろ…

それから少しして学園長に俺だけ残ってくれと言われたので残っています

学園長「さてさて——八幡君、君は崩壊現象から生き残った：言わばイレギュラーだ!!君はこれからどうしたいのかネ？」

八幡「そうですね……とりあえずはする事ないんで魔道士になるだけっすかね、正直専業主夫になりましたかったすけど」

学園長「なるほどなるほど：君は面白いね、特にその腐った目——魔道士としてはそそられるところ満載っ!!」

八幡「やめてください、デフォっすから」

学園長「それはそれはまた面白い、君のテーマが楽しみだよ……話ほこれだけだから質問がなかったら行っていいよ」

八幡「それじゃあ何にもないんで失礼しまーす……って思ったけど自分の部屋どこですか？」

学園長「ああ：君の部屋は——」

八幡「失礼しました」

やったぜ！1人で住める？って事だよな気楽でよかった

自分の部屋に来て

八幡「おお、言うほど狭くはないしこりゃいいわ」

ドサツとベッドに寝転がり

八幡「はあ……とりあえず注目されてなさそうだったし良かった……めんどそうだしな」

八幡「あつ……風呂あるんだよな？」

ハルア「はい、ありますよ」

八幡「魔道書の状態でも喋れるのか、ありがとな……風呂行くか」
トントントツ……誰かが扉をノックしたな

八幡「はい」

アラタ「はちまーん、一緒に風呂行こーぜ」

八幡「まあ今から行こうと思つてたしいぞー、準備するから少し
そこで待つてくれ」

アラタ「おーう」

準備が終わり扉を開けて

八幡「待たせたな」

アラタ「おう、行くか」

少しして男湯をくぐり洗面所に入り

八幡「広くね？」

アラタ「……確かに広いな、女ばつかて聞いてたからこそっちはへボ
いと思つてた」

アステイルの写本「無駄に金かけてんだらうよ」

八幡「うおっ！……その声魔道書か？」

アステイルの写本「……ああ、そうだぜ」

八幡「なんかすげえな……」

アステイルの写本「……お前さんの魔道書も喋れるだらうが！」

ハルア「はい、喋れますよ」

アステイルの写本「やっぱりな」

八幡「魔道書は置いたしアイツらだけで居させても魔道書同士だから
案外気楽で風呂の間退屈しないんじゃないやね？」

アラタ「そうっばいな……そういや、八幡の魔道書美人だよな」

八幡「まあそうだな、春日の魔道書の姿はあれが本物じゃないんだ
ろ？見たことあんのか？」

アラタ「いんや、まだちゃんとした姿は見てないな」

少しして風呂場に行き……目の前に誰かいた

そしたら春日が口を開き

アラタ「こんばんは」

??? 「こんばんは」

八幡 「うすっ」

と言ったので一応挨拶はしておく

アラタ 「ふうっ……」

八幡 「よっこいせ……」

カコ：カコ

と春日がやっていたらさっきの人が

??? 「ボディソープよ」

アラタ 「マジでか？」

??? 「本物はこっち、リンスインシャンプー」

何やってんだよ春日……てか喋り方女っぽくね…?

とか思ってたら

アラタ 「だあああああー!!」

??? 「目に入った？」

八幡 「どした？」

アラタ 「そうじゃねえ!! 八幡! こいつ女だぞ…!! しかもそこは普通
「きゃー」とかだろうがっ!!」

八幡 「はっ!？」

??? 「あ……そうだったかも——きゃー……」

2人 「棒読みかよっ!!」

アラタ 「……あれ、お前……」

??? 「胸の大きさは82のCよ？」

アラタ 「ほう……それはそれは………ちそうさまでしたーっ!」

八幡 「は?! ちよっ、待てよ!」

春日が廊下にそそくさと出ていきそれを追いかける俺……え? 廊下
?

リリース「あら、何事ですかアラタと八幡さん——って服を着て
くださいっ!!」

アラタ 「だよなっ!?! その反応だよなっ!?!」

八幡 「そうだよなっ?!」

リリス「なっ…何を言っ…」

アラタ「いや、リリスは正しいっ」

リリス「だから何を言っ…」

アラタ「いや…そんなことはどうでもいいんだっ!!今、聖がいたんだが?」

八幡「いや…そんな事ではないだろ…てか聖っ…?見てなかったからよくわからん」

アラタ「お前よく見なかったな…ありや眼福だったぞ?」

八幡「まじで…?」

リリス「ああ…アリンさんのことですね」

アラタ「知っていたのか!?聖にそっくりなのがいるの?」

リリス「私から見れば聖さんの方がアリンさんに似ているという認識でした」

八幡「まあそっちからしたらそうだよな」

アラタ「ああ…つてことはアイツはやっぱり別人なんだな」

リリス「はい、そうなるかと」

リリス「……ん?」

アラタ「どうした?」

リリス「……お風呂にアリンさんが?」

2人「ああ」

あ…浅見さんが動いた、そして男湯を覗いた?

リリス「アリンさんっ!!こちらは男性専用なんですよ!?!」

わあお、何もなさそうに牛乳飲んでやがる…

アリン「誰もいないから静かだいいと思って」

リリス「これからはだれかいるんですっ!!」

アリン「私は気にしない」

リリス「気にしてください!!」

アリン「きやー…」

リリス「タイミングが違います!」

そんなこんなで浅見さんがアリン？って子に色々叱ってたら春日がなんか言っていたので聞き耳を立てると

アラタ「しかしトリニティセブン…ね…オレにとって重要な位置付けになる——そんな気がする」

八幡「…：…そうかもしれないがとりあえずズボンはけよ」

俺は既にはいている！

アラタ「あ、忘れてた」

八幡「忘れんなよ…」

なんか退屈しなさそうだな…まあこんなのもいいか

俺が魔道士になれる…？④

あれから春日がズボンを履いてから「俺の部屋でちと話さねーか？」と言われて「あー…まあいいぞなんか目覚めちまったからな」と返しておいて今は春日の部屋に入ったんだが……

アラタ「……で、何で俺の部屋にお前らがいるんだ…？」

セリナ「取材です!!あ、八幡さんはアラタさんと行動してたんですね…そう言えば自己紹介はしてませんでしたね、セリナ!!シャルロツクです!!」

???「取材つス、貴方が比企谷八幡さんつスね、自分は風間レヴィつス」

八幡「お、おう…比企谷八幡だ」

唐突すぎて焦ってしまった…不覚だ

リリス「わっ…私はこんな時間に女子が男子の部屋にというのが教師として許せなかったの……」

アラタ「いや…リリスも俺と同じ年じゃねーか」

リリス「ですが立場は教師ですからっ」

アラタ「んー…なあ八幡、こいつらも一緒でいいか？」

八幡「ああ…まあ構わない」

八幡「んで、風間とシャルロツクは魔王候補の春日に取材つてことか」

レヴィ「そうつスね」

セリナ「ですです」

セリナ「好きな食べ物は何ですか？」

アラタ「うむ…好きな食べ物は唐揚げだな」

リリス「どうして私にふるんですか!？」

レヴィ「ニンジャ特製唐揚げ食べてみるつスカ?惚れ薬入りつスケど」

アラタ「是非に」

リリス「アラター!!」

セリナ「惚れ薬入りでいいんですか？」

アラタ「魔道つてのは常識を覆さなきゃいけないんだろ？まあ滅多に食えるモンじゃねーしな」

八幡「それはそれで好奇心旺盛すぎるだろ…」

セリナ「では惚れ薬を飲んで野獣化したらまず誰を襲いますか？」

アラタ「うーんそうだなー…胸のデカイ順だろうな」

リリス「アーラーター!! 本当にあなたって人はー!!」

まあまあと言いながら言いくるめてるな………本当に漫才したら売れんじゃねーの？

アラタ「そうだ、部屋に来たついでに魔道について教えてくれよ」

リリス「え？あ…はい」

セリナ「リリス先生は根っからの教師ですからねー」

レヴィ「ああやって上手く勉強にもついていかれると弱いわけツスね

———という夜のレッスンにゆくゆくは………」

リリス「なりませんっ!!」

セリナ「リリス先生いじり可愛いです」

レヴィ「萌リリスっスね」

リリス「あ…あなたたちは……」

アラタ「なあリリス、コイツはそもそも一体なんなんだ？」

そう言われると浅見が息を飲んで言う

リリス「アステイルの写本……」

セリナ「アステイルの写本!？」

セリナ「それって本当なんですか!？」

リリス「ええ…あくまで学園長が言うにはですよ？」

八幡「アステイルの写本………確か伝説の魔道書として有名であり異世界の知識が宿ると言われている…だっけか？」

リリス「そうです……そういえばまだ来てー日目ですよ？もう知ってるんですか？勉強熱心ですね」

八幡「まあ読書は趣味だったんでね、色々と漁らせてもらってる」
アラタ「………そんな大層な代物なのか」

リリス「その写本については本当に詳しいことはわかってないんです、何せ存在自体が伝説のようなものでしたから」

リリス「そもそも魔道士にはテーマという研究概念が必要なわけですが、魔道書はそのテーマについて記載されていて——」

ドツ

なんだ？

地震と停電？いや……このタイミングとこの学園と考えると……誰かが春日を試している？

ハルア『はい、その通りです』

八幡『うおっ……頭の中で喋れんのか？それなら今の状況を教えてくれ』

ハルア『そうです、これは結界ですね……術式はベッドの下にあるので教えて出ることも出来るのですが……きつと試すという思惑があるので黙っておきませんか？』

八幡『あー……そうだな、正直俺もそう思ってた……きつと魔王候補って事で試されてるんだらうな』

八幡「おーい、お前ら大丈夫かー？」

リリス「大丈夫と言いたいところですが——」

そして数分してアステイルの写本が灯りをつけた

春日は暗闇の中で何かしたんだらうか殴られている

アラタ「ノブすらまわらん」

レヴィ「窓も開かないっス」

アラタ「ふむ……結界つてのは？」

アステイルの写本「お前さんが作った異世界のかなりスモール版さね」

アラタ「ああ……箱庭作りみたいなもんか」

セリナ「ず……随分あっさりと凄いやこと言ってますね……」

アラタ「よくわからん以上動揺しても仕方ないだろ、それに……
ああやってあそこで欠伸してる奴よりは動揺してるぞ……」

八幡「ふあ〜……」

「緊張感なさすぎだろ!!」「緊張感ないっすね〜……」「緊張感なさすぎです!!」

酷い言われようだ……知ってるんだから仕方ないじゃん？

八幡「そうか？だつて正直眠いしどうでもいい、終わらせるんならさっさと終わらせてくれ：俺は働きたくない」

アラタ「お前は相変わらずだなく……」

リリース「結界で空間が断絶されている……とかでしょうか、長年通つてますがこんなのは初めてです……」

アステイルの写本「まっその辺を考えて脱出するのが今回のゲームなんだろうさ」

アラタ「ゲームつてどういうことだ……?……?……お前もしかしなくても脱出方法知ってるだろ?」

アステイルの写本「まあこんなのちよろつと調べればすぐわかるレベルだな……ふあ〜……そんなわけだからクリアできたら呼んでくれお休み……」

アラタ「まだ寝んのかよ!？」

八幡「俺より呑気じゃねえか……」

アラタ「……まあ寝るのは構わんがせめて光ったままでいてくれ
あいよー、と言うとさらに光る

レヴィ「閉じ込められたつてのに緊張感ないっすね……あの人に比べればあるんだろうっすけど」

アラタ「まあ慌ててもなんもねーしな、問題はトイレが部屋にな
いってことぐらいか」

セリナ「それは困ります乙女の一大事ですよ!？」

アラタ「だよなあ……んでドアはノブが回らなくて窓はさっぱり開

かない…と」

リリス「?…アラタ?」

バアン

椅子でドアを壊す…ああ、なるほどね

リリス「アラタ…!! 一体なにしているんですか!?!」

レヴィ「うわーヤンキーみたいツスねー」

八幡「めちやくちやびつくりしたじゃねえかよ…」

もちろん嘘である

アラタ「ふむ…椅子が壊れてしまったが大した問題じゃないな」

セリナ「問題ですよ!! いきなり何を!?!——あつなるほど、常識外れな行為っていうのを試しているんですね」

アラタ「うむ、清く正しい生き方をしてきたからな…こういうヤンチャは初めてやってみた」

アラタ「常識に囚われないことが魔道つて聞いたんだね、非常識なことをするのがここを開けるキーなのかと思ったんだが…」

セリナ「しかしこんなこと一体誰がなんのために…」

レヴィ「おそらく1番の目的はアラタさんだと思うっス」

アラタ「だろっス」

八幡「多分だがこんな事をしたのか仕向けるのかしたのは学園長だろうな、きつと外で「お手並み拝見ってところかな」とか言つてウザイ顔してると思う」

アラタ「確かにやりそうだな」

レヴィ&セリナ「なんか想像できるっスね（できますね）…」

リリス「た、確かに…」

八幡「ま、俺は何もしないからあと頼んだわ」

4人「やれ（やるっスよ）（やってください）!」

八幡「はいはい…わかりましたよ…」

まあやるふりでいいだろ

（数分後）

アラタ「何も…ないな…いよいよもって諦めて寝るか」

八幡「お、まじ?」

セリナ「いやいや!!諦めちゃダメですつて!!私たちの名誉がヤバイんですつて!!」

八幡&アラタ「大丈夫だ、黙ってるからっ」

セリナ「なんの解決にもなつてないっ!!」

思つたけど浅見さんモジモジしてね?

八幡「浅見さんどした?」

レヴィ「さつきからモジモジしてるツスね…」

リリス「え、あつ…いえなんでも…」

アラタ「まさか———toイレに行きたい…とか?」

リリス「あ…いえ…あの…その…」

セリナ「時は一刻を争いますよ!!」

レヴィ「早く!!」

アラタ「いかな…ここでリリス程の美少女教師が失禁とか色々…」

リリス「そんなことしませんっ!!」

リリス「あつ…んっ…くっ…ふうっ…んんっ…」

なんかエロいな…既にやばいけどもう少しヤバそうになったら流石に教えるか

ハルア『そうですね…私としても罪悪感が…』

うん、そうしよう…頑張れ!後ちよつとの辛抱だぞ!

レヴィ「…これはこれで見てみたいっスね」

セリナ「な…なんとかガマンしないと…」

レヴィ「ちなみにここでお知らせっス…実は…自分もピンチっス…」

セリナ「2人しておしっこ系ヒロインを狙うつもりですか!?!」

レヴィ「さあセリナさんもこっち来るツスよー」

セリナ「…や、やめてえええー…!」

八幡「何やってんだ!早く探せ!」

アラタ「いかな、このままだと凄いことになってしまう」

アラタ「諦めて魔道書を頼ろう……おーい魔道書よー」

アステイルの写本「んあ？なんだあ……？まだ眠いんだが……」

アラタ「寝ぼけてるのか……ふむ……」

アイコンタクトを送られたので領いておく

アラタ「おーこれが出口かあー、よっしゃー!!」

セリナ「わー、ちよー簡単でしたねー!!」

レヴィ「ニンジャ的にもバツチリだったっすよー」

八幡「そうだなー、楽ちん楽ちん」

アラタ「そんなわけで魔道書よー、お前の力なんか必要なかったぜー!!」

リリス「さ……さすがにそんなベタな手が伝説の魔道書に通じたりなんて……」

アステイルの写本「んにゃ……あーん？なんだ……ベッドの下が怪しいってもうわかったのか……むにゃ……」

まじで!?

アラタ「よしっ!!ベッドの下だ!!」

レヴィ「忍法ちやぶ台返し!!ベッドバージョン!!」

セリナ「魔力サーチ、魔力基点発見!!」

リリス「結界……破壊……!!」

八幡「おお……これが魔道か」

アラタ「さあ、おしよん行ってこいっ!!」

アステイルの写本「はっはっは!!お前いいセンスしてるよアラタ!!魔道書である私をだますとはな、確かに常識的じゃないぜ!!」

アラタ「そりやどうも……」

アステイルの写本「お前の研究するテーマなんなのか楽しみでならないぜ、はははー!」

アラタ「ふむ、テーマか」

なんかあの魔道書俺が知ってること知ってそうだからさっさと出るか——とドア直前で

アステイルの写本「ちなみにな、その比企谷八幡は最初っからわかってたぜ!!」

八幡「げっ」

アラタ「おい、それ本当か？」

八幡「あ、ああ…まあな…まあ試されてるっぽいから言っても意味ないだろ？」

アラタ「まあそうだな…ニヤ…あーうん、許す行ってよし！」
八幡「お、おう？」

なんか嫌な予感するがまあいいか

そして後日

アラタ「なありリスよ…どういことだこれ」
リリス「…えーと、どうなんでしようね…」

なんか神無月アリンって子に付きまとわれていた

つとそんな事はどうでも良い、そして今は放課後…自分のテーマを部屋でハルアに相談している

八幡「うーん…どうしようか…」

ハルア「これは八幡様自信の問題なので正直私が口を出す事ではないので…一緒に話す事ぐらいしか…」

そうか…っ!!

ハルア「どうかしましたか？」

八幡「ああ、テーマが決まった…俺のテーマは犠牲だ」

ハルア「!!そうですか、それでしたら色欲でございますね」
それならさっそくやるか

八幡「色欲のアーカイブに接続、テーマを実行するっ!!」

八幡「おお…なんか力が湧き上がるみたいだ…それにこの格好は

？」

ハルア「メイガスモードです、おめでとうございますー！」

八幡「そうか……とりあえずなんか試して見てもいいのか？これって」

ハルア「うーん……いいんじゃないですか？」

八幡「それならやってみるかね……とりあえず犠牲は……このペンでいいか、とりあえずペンよ……犠牲になれ」

八幡「おっ、消えた……何が起こった？」

ハルア「そうですね……微力な魔力回復……ですね」

八幡「なるほど……つてことは質量で回復できる量が変わるってことか……」

ゴオオオ

八幡「なんだ!?!」

ハルア「崩壊現象でございます！基点は春日アラタさんの部屋です！」

八幡「あいつまたなんかやったのか!?!せつかくの俺の魔道士デビューに何してくれやがる！」

春日の部屋に入ると春日が苦しんでいた

俺が魔道士になれる…？⑤

とりあえず聞いてみることにした

八幡「これは…何があつたんだ？」

リリス「アリンさんが崩壊現象を…」

アリン「私がやったわ」

???「それを今私が止めています、貴方が比企谷八幡さんですね…山奈ミラと申します、以後お見知りおきを…」

???「そんなもって私は不動アキオ、まあ私もそんなもんさ」

八幡「あ、ああ…」

ミラ「…アキオ、彼を殺してください…この男が崩壊現象の起点です」

アキオ「あっさり言ってくれぬぜ」

リリス「いけませんアキオさん!!」

アリン「——っ!?体が動かないわ…!?!」

アキオ「悪く思わいでくれよ、恨みはないが——魔を討つのが私の役目なんでね!!」

ドツ

八幡「うわあ…すっげえいい音した」

リリス「アラタ!!」

ミラ「ありがとうございますアキオ」

アキオ「やれやれ…これで終わりっど…」

アリン「彼の魔力が消えたわ」

リリス「そ…そんな…」

ミラ「…さて、仕事は片付きました…帰りましょうかアキオ」

八幡「いいやまだだ」

ゴゴゴゴゴと崩壊現象がまた始まる

ミラ「崩壊現象が終わらない!?!」

アキオ「どういうことだ大将!!アイツが崩壊現象の基点じゃないのか!?!」

八幡「あいつら魔王候補つてやつなんだろ?ここで死ぬようなやつじゃない……きつと誰かが助けてる」

リリス「まさか——アラタ!!」

八幡「だが流石にヤバいな、色々と」

リリス「早くなんとかしないと……」

ミラ「いまいましたい魔王候補め……!!」

アキオ「しかしこりやホントにヤバいかもな!」

八幡「まあ魔道やら魔術やら少し勉強したんで使ってみたいしな……やってみるか」

皆と同じように手を前にかざし魔力で崩壊現象を抑えると

八幡「あ、これ案外いけるな」

4人「なっ!?!」

アキオ「……お前さん筋いいな、検閲官こないか?」

ミラ「そうですね……人手不足ですしこの際いいかもしれないですね」

八幡「やめえくれ、タダでさえ働きたくない俺が今こうしてやる事さえ珍しいんだ……めんどいし」

アキオ「そりや残念だ!きたくなったら言ってくれ」

八幡「やらないと思うから安心してくれ……つと、そろそろ来てもいいんじゃないか?」

ピシッ

アラタ「そいやああー!!」

アキオ「うわあ!?!」

アラタ「よっこいせつと……」

リリス「生きていたのですか!?!」

アラタ「ん?ああ……なんかリリスほどじゃないがスタイルのいい美少女に助けられた」

アリン「多分……ユイ……あの子の夢の世界ね」
なにそれ凄い

ミラ「アキオ……どうやら貴女は失敗していたのですね……」

アキオ「しつ……仕方ないだろ!? ユイが庇うなんて思わないしつ!!」

ミラ「ではもう一度今度は確実に仕留めてください」

アキオ「ちえっ……ホント人使いが荒いぜ……」

アラタ「ちよいタンマ!!……この崩壊現象なんだけどさ……これをオレがコントロールできれば殺される必要ねーんだろ?」

ミラ「何を言い出すかと思えば……」

リリス「そうですねよアラタ!!崩壊現象なんてコントロールできるはずありません!!」

アラタ「だが「魔道は全ての可能性を否定しない」だろ? だったらやってみなきやわからんさ」

ミラ「詭弁です、私の正義はそんな言葉では揺らぎません」

アラタ「ならもしコントロールできなかつたら容赦なく粉微塵にしてくれよ」

ミラ「そんなこと言われなくとも今すぐ——」

アキオ「まあいいじゃないかミラ、できたらOKでできなきや殺せばいいんだし」

ミラ「……分かりました、仕方ありませんいでしよう……ただ——少しでも失敗したら本当に容赦なく消滅させます」

アラタ「ああいいぜ——魔道書よ!!オレのテーマを言うぜっ」

アステイル「あん? ああなんだ、決まったのか」

アラタ「おうよ!!オレのテーマが気に入ったら力を貸してくれよな」

アステイル「ははっいいいぜ!!気に入ったらな!!さあ言えよアラタ!!」

アラタ「ああ……オレのテーマは——支配だ」

アステイル「ハハハハ!!確かにお前の心、存在、本質、魂の意味——それは真に支配だマスター!!そしてそれは傲慢のアーカイブにある!!」

アラタ「だろう!あのしかめっ面がヒントになったんだ」

アステイル「今ここにアステイルの写本は傲慢のアーカイブに属す

る支配をテーマにするマスターと契約をすることを違うぜ!! さあ言えアラタ契約だ!!」

アラタ「おうよっ——傲慢のアーカイブに接続——テーマを実行するっ!!」

リリース「アラタのメイガスモード…すごい魔力…」

アラタ「ここに溢れる全魔力を支配して打ち消すぜアステイルの写本!!」

アステイルの写本「あいよマスター!!」

えつまじで？

八幡『ハルア、春日が発動する瞬間に防御結界を貼ってくれ』

ハルア『了解しました』

アラタ「崩壊現象だかなんだか知らねーが消え失せろ!!」

……………ほら言わんこつちやない、さてと…今のうちに退散つと

比企谷八幡 side out

山奈ミラ side

比企谷八幡…変な人ですね、初心者であれをくらわない…そして気づかれずに部屋からそそくさと出ましたか。

魔王候補とは違うイレギュラーな何か、もしそれが悪の場合は容赦なく消滅させます

山奈ミラ side out

比企谷八幡 side

そして後日…なんでビーチ？

そして最近春日と居ることが多い、てかなんで料理？これ俺とぼつちりだろ…

アラタ「うーむ…何故こうなった…」

「魔王焼きそば2つくださーい」

なんだよそのネーミングセンス

アラタ「あいよー2人前ねー」

「コーラくださーい、3つ!」

アラタ「あいよー」

「ホットドッグ1つー」

アラタ「あいあいー」

リリス「自業自得ですっ!!そもそも貴方達が学園の校舎を壊しちゃったからでしょうがっ!!」

アラタ「そうは言ってもなあ…」

アリン「そうよ…だんな様のせいだもの、しょうがないわ」

アラタ「お前のせいでもあるだろうがっ」

アリン「つまり夫婦の共同作業?」

アラタ「ふむ…そうとも言える」

リリス「とにかくっ!今後校舎を破壊するような実験は一切禁止ですからねっ!!」

アラタ「わ…わかりました…」

アリン「…難しいのね」

八幡「そんな事よりとぼっちりくらってる俺より働いてないってどーゆー事ですかね?春日さんよお…」

アラタ「でもよ…お前何かある事しよっちゅう逃げてんじえか、昨日だつて俺お前に聞きたいことあつたし」

八幡「聞きたいこと??」

アラタ「お前いつの間に魔力とか使えるようになってんだ?」

八幡「ちゃんと勉強したんだよ、アホが」

アラタ「それはいつ?」

八幡「昨日だ昨日、お前があんななるちよつと前にな」

レヴィ「つてことは昨日の崩壊現象の前の魔力の余波は八幡さんっすか」

八幡「そうなのか？俺は適当にやってただけだしな……てかいきなりだな」

レヴィ「どうもっスー」

セリナ「こんにちはー!!」

アラタ「ようっ!!なかなか可愛い水着じゃねーか」

セリナ「あはは！ありがとうございますっ」

レヴィ「ペタ属性の皆さんを悩殺っす」

八幡「てか俺もうやめていい？いいよね？とぼっちりだからやめていいよね？休憩したいし」

アラタ「あー…まあうん、行っていいぞ」

八幡「だからなんで上からなんだよ……まあ行ってくるわ」

そして今わざわざ抜け出して魔術の特訓である

八幡「にしても魔道つてのは興味深いよな……にしてもテーマは犠牲、つまりなにかを糧に…血で試してみるのもありだな」

レヴィ「こんな岩陰で何してるっスかー」

八幡「そりゃー俺なりの魔道の研究だよ」

レヴィ「やっぱりあの時にテーマを決めたんっスね」

八幡「まあそうだな…イマイチ分からなくてな」

レヴィ「八幡さんはどんなテーマにしたっスかー？」

八幡「……犠牲」

レヴィ「犠牲っスか、初めて聴いたっスね……」

八幡「そうなのか？」

レヴィ「そうっスね、ちなみにアラタさんからおしよん事件の事聞いて探しにきたんっスよー」

八幡「そ、そそそれで？」

レヴィ「それでシメにきたっス……つてのは冗談で本当は自分のには魔王候補も興味惹かれるんっスけど八幡さん…貴方にも興味ありっス」

八幡「なんだ良かった……で？なんでなんもない俺に興味を？」

レヴィ「そうっすね、その魔力の質とか気になるっす…それにリリス先生に昨日の事を聞いたっすねからねー…イレギュラー中のイレギュラーがどんな感じなのかと気になったわけっす」

八幡「え？なに？俺つてもしかしてすごい存在だったりするの？やだなー…目立ちたくないなー…」

レヴィ「まあ昨日の事が表に出されたら晴れて皆の人気者…になっちゃうかも知れないっすね」

八幡「やだよめんどくさい」

レヴィ「うっわ…即答っすか、それじゃあそうっすね…メイガスモードを見てくださいいっす…それでおしよん事件もチャラっす」

八幡「それだけでいい？他要求しない？…正直怖いんだけど」

レヴィ「はい、約束するっすよ」

八幡「それなら……色欲のアーカイブに接続、テーマを実行する！」

これでいいんだよな？

レヴィ「それで何が出来るっすか？なんでもいいから試してくださいっす」

八幡「……そうだな、なんか要らないモンとかないか？」

レヴィ「……んー…あっこれでどうっすか？」

落ちていた石を渡された

八幡「そうだな…もうちよつとデカイのもないか？」

レヴィ「ここにあるっす」

あ、そんな近くにあったのか

八幡「そうだな…まずこの岩が…犠牲になれ、と言ったら俺はどうなった？」

魔道士がないと詠唱しなきゃいけないから面倒だしこれは言わなくていいか

レヴィ「正直全くわからないっす」

八幡「じゃあこっちの大きな岩を…犠牲になれ」

レヴィ「…!?まさか、魔力が増えるっすか？それも質量で変わるっす感じっすね」

八幡「正解だ、8万ポイントやろう…八幡だけに」

レヴィ「なんスかそのネタ…：とりあえず見れたんで良しとするっス、戦闘になった時はさらに使えるようになってそうっスからね…：その時はよろしくっス」

と言つて風間はどこか行つた…：てか速くね!?

改めて忍者凄いな

八幡「そうだな…：血は戦闘中でいいか、これでおしまいっ…：それになんか重要な事忘れてる気がするんだよな…：」

まあいつか、さつさと旅館行くか…：遅いし

そして旅館の自分の部屋でハルアが実体化になつて喋りたいと言つたので喋っている

八幡「なあハルア、お前つて春日とかアスティルの写本の前だけでしか喋つた事ないが…：なんでなんだ?」

あ、浅見さんもいたわ

ハルア「いえ、特に理由ありませんよ…：自分が出る時でもないな…とも思つてでてないって言うのもありますけどね」

八幡「ほーん」

ハルア「なんですかその信じてなさそうな返事はっ!!」

八幡「いや、信じてるぞちよー信じてる」

ハルア「絶対信じてませんよね!」

八幡「とりあえずそこはどうでもいいか…」

ハルア「八幡様から言つてきたのに…：」

いじけてるな…：なにそれ超可愛い

とか考えてるドアの向こうから

アラタ「おーいはちまーん!中から女の声したがお邪魔だつかー!」

なっ!?!あいつぶぎけんじゃねえ!

八幡「おま!大声でなんてこと言つてやがる!!」

急いで扉を開けると浅見さんと風間とシャルロツクと神無月と春

日がいた

アラタ「えー、つつても結構聞こえてたぞ？」

八幡「え？まじ？」

「おう（ええ）」

リリース「ダメですよ八幡さん！ちゃんと節度をもつてしてください
!!」

八幡「いや、違えつての……おーい、ハルアこっち来て俺の潔白の
証明を頼むー」

ハルア「はーい、わかりましたー」

とてとてとハルアがこっちに来た

可愛い、これはこれでいいな。

ハルア「えつと……カルマリアの写本、今はハルアと八幡様に呼ば
れています……よろしくお願いします」

ハルアが丁寧なお辞儀をしながら言った

セリナ「カルマリアの写本？聞いた事ないですね……」

ハルア「ええ、ずっと世界を旅してましたから」

レヴィ「旅つてのはどんなのっスか？」

八幡「そうだな……本屋に売られたりとかな」

ハルア「は、八幡様!!言わないって言ってくれたじゃないですか!!」
顔を真っ赤にして言ってくる

なんか……癒されるな

八幡「ま、まあとりあえず元に戻ってくれ」

ハルア「はい……」

魔道書サイズに戻り、そしたら春日が口を開いた

アラタ「風呂行かねーか？もちろん混浴で!!」

八幡「馬鹿じゃねーの？とりあえず俺は風呂まで同行するわ」

アラタ「お前欲がねーな……まあとりあえず散策やらしながら話す
わ、あつちなみに八幡は知ってることだから聞き流してもよし」

八幡「りょーかい」

それから春日が魔道士になる理由や他愛のない話をしながら（もち

ろん俺は喋ってない）風呂の前で

アラタ「やはりここは混浴風呂しかあるまいっ!!」

八幡「じゃ、俺はここで」

そして少しして男湯の風呂に浸かってたら混浴風呂から春日の声が聞こえた

アラタ「なんで水着なんだよ!!普通ここは一肌脱ぐってもんだろっ
がっ」

と聞こえてきた

八幡「あいつ声でけーな…」

そして後日

教室に向かい、入ると

八幡「うおっ、みんな寝てる」

中には春日達がいた

八幡「これどーなってるんだ?」

アラタ「お、八幡か…リリスの授業集団ボイコット?」

リリス「ええーっ!!そんなっ!!」

八幡「そんなんじゃないだろ」

レヴィ「そうっスね…これは…——っスね」

まじか…こんなこと多くねえか?

俺が魔道士になれる…？終

色々あつて今俺らは学長室にいる

そして……………

ビブリア「崩壊現象だね、強い魔力を持つ子…つまりキミら以外の生徒はみな寝てしまった——そういう事みたいだね」

ビブリア「——というわけで…だ、早速眠ってるカワイコちゃんたちにイタズラしに行こうっ!!」

アラタ「ふっ、オレもついに本気を出す時が来たようだ…」

バチーン

八幡「うつわ…痛そうだな…」

ビブリア「…なにも殴らなくてもいいと思うんだよりリスちゃん」
アラタ「癖になったらどうしてくれる」

リス「ふぎけるのもいい加減にしてください!!」

ミラ「まったくバカバカしい…行きますよアキオ、これ以上の話は時間の無駄です」

ミラ「とつととその崩壊現象を消滅させればいいのでしょうか？」

ビブリア「そうそう!!そうしてもらおうと君たちを呼んだんだよ——ここはやっぱり皆で力を合わせて謎の事件に挑む…!!まさに王道ではないかなあと、ね!!」

ミラ「私たち以外には必要ありませんから、足でまといです…それでは」

バタンツ

威勢がいいな…

八幡「学园长、関係の無いことですが少し申し出があります」

ビブリア「なにかな？」

八幡「ここに約1〜2年のレポートや課題、色々なプリントがあります…」

ビブリア「…それがどうしたのかね？」

八幡「…大体1年か半年ぐらいですかね、休学を所望します」

ビブリア以外「は!？」

ビブリア「その理由は何かね？」

八幡「こいつの回収と修行も兼ねてっすかね…」

俺が魔道書をもって言うよ

ビブリア「よろしい!!許可しよう、ただし条件がある!」

八幡「大方今回の件に協力しろって事ですよね？」

ビブリア「そうそう、君がどんな力を持つてるかもレヴィちゃん以外は気になってるみたいだしネっ!!」

リリス「確かに気にはなりますが…なぜ許可を？」

ビブリア「まずこの学園には投稿日数などないにも等しい、そして魔道を極めて欲しいというのが魔道の学園としての本質だからかな…それを教えるのも僕達なんだけど君は例外だからね、基礎がないモノは自分で極めるしかない、そーゆーことさ。」

八幡「そこまで理解がいつてて助かります」

ビブリア「それはよかったよかった、教師としては生徒が育つのは本望だからね——さて、本題に入ろうか」

リリス「そうですね…ホントに崩壊現象なんですか？」

ビブリア「ああ本当だ、学園の地下から凄い魔力が溢れ出しているね」

レヴィ「やっぱリユイさんツスカ!？」

アラタ「ユイって…あの夢の中にいるっていうリリスの次にスタイルのいい子か？」

リリス「スタイルで覚えなくてください」

ビブリア「ご明察のとおりだね、この現象は彼女の魔力が大暴走して起きている…彼女は学園の地下にあるダンジョンに住んでいてね」

アラタ「ダンジョンなんてあんのかよ!？」

ビブリア「ここは魔道学園だからねっ!!」

八幡「すみません、自分準備があるので抜けさせてもらいます
早く準備しないと色々手遅れになるからな

それに多分だが正直俺がいなくてもいけそうな気がする
だってまだなりたてだぞ？怖い怖い、あの学園長は危険だ

そのあと呼ばれて今はトリニティセブンの3人と魔王候補1人と
言う豪華なメンバーで地下を歩いている

アラタ「なんつーかキモイ空間だなおい」

リリス「普段はごく普通の巨大迷宮なのですが……」

アリン「…魔道士はよく巨大迷宮に住むのよ」

アラタ「……お約束だな」

アリン「この原因も多分ユイの仕業…あの子が目覚めようとしてい
る…」

アラタ「目覚め？寝てんのかアイツ？」

レヴィ「ユイさんは世界の裏側——夢の世界で過ごす魔道士つ
ス、そしてそれこそが彼女のテーマと言っても過言ではないってこ
とっスよ」

アラタ「寝続けることがテーマの研究なのか」

レヴィ「ええ、だからこそ封印されてるっス」

アラタ「封印？なんかヤバいのか？」

八幡「そりや魔力が溢れ出してるっつてたからな、枢機クラスだろ
うよ…」

レヴィ「ご名答っスね、学園だと学園長の次レベルっス」

アリン「…彼女の魔力はやがて「世界」すらも眠りにつかせるわ」

アラタ「…世界が寝たらどうなるんだ？」

レヴィ「消滅っス」

八幡「そりや怖いわ、さつきと終わらせんと…それにきつとあの二
人より先に探さなきゃいけないんだろ？原因だから、あの二人はそれ
を除去するものだから」

レヴィ「そうっスね、アラタさん、八幡さん、この先危険なのでメ
イガスモードでお願いするっス」

八幡「了解」

アラタ「お…おう…」

風間以外メイガスモードになり進んでいると

レヴィ「：おや、迎えが出てきたっスよ」

八幡「なんだあれ？」アラタ「なんだありや？」

アリン「魔物ね」

八幡「まさにデスゲームじゃねーかよ：」

リリス「崩壊現象や魔力が乱れる場に現れる異世界の存在です」

アラタ「：ってことはこないだの銃が役に立つってことか!!」

八幡「こないだのってなんだ？」

アリン「だんな様がりリス先生に頼んでみせてもらってそれを真似して自分なりに改造したものね」

八幡「ほえー、春日お前主人公補正かかりまくりかよ：」

アラタ「すげえだろー!!そしてりリスよ：どうすりゃいいんだっけ
：？」

八幡「あー、ここは俺に任せてもらってもいいか？少し試したい」

レヴィ「：いいと思うっスよー、自分はどんなのか気になるっス」

アラタ「それはオレも気になるな」

アリン「私も少し気になるわ」

リリス「確かに気になりますが：教師としては見過ごせません、なので危なくなったらフォローさせてもらいます」

八幡「へいへい、とりあえずやってくるわ：：：：」

魔物に向かいながら腰にぶら下げている袋から石を持ち

アラタ「アレ何に使うんだ？」

レヴィ「多分面白いッスよ」

八幡「犠牲になれ：：：：」

石が消える

八幡「認識状態：石：分類効果身体強化」

八幡「ハルア、手に結界を」

ハルア「了解しました」

魔物の前に行き

八幡「：はあっ!!」

魔物を殴り殺していき終わり

八幡「ふう……いつつつ、こりやなれないとダメだな……筋肉痛が……」
レヴィ「自分の出番なくなつた見たいツスね」

春日、神無月、浅見さんは啞然としている

アラタ「……な、なあ……今のなんだ？」
リリース「……なんですか？」
リン「今のは何……？」

八幡「走りながらでいいか？」

アラタ「おう……」

走り出し説明を始める

八幡「俺のテーマは犠牲、まず何を犠牲にするか悩んでそこら辺にある物を適当に犠牲にしてみた……そしたら魔力が回復したんでね、それから分かったことがいくつか、まず質量によつて得る大きさと軽い代償がある、犠牲にするものにより魔力回復以外の使い方がある——それがさつきやったやつだ、岩や石など金属類などもあるがそれ等は身体強化全般だな……質問あるやつは？」

リリース「……他の物質の能力はなにか分かっているのですか？」

八幡「いんや、他はまだ試してない」

アラタ「代償つたがさつきやったやつのだ償は？」

八幡「あれは質量が少ないからな、軽い筋肉痛程度だった」

アリン「……軽い筋肉痛という事はそれ以上にもなるつてことよね？」

八幡「ああ、多分これは慣れだがあれより100倍近く大きいと今じゃ骨が折れるな」

レヴィ「質問タイムは終わりツス、この先から至る所に罠が——」

アラタ「あつ……」

レヴィ「遅かつたツスね」

八幡「これは鉄球が追っかけてくるやつだな」

アラタ「おいい!!」

レヴィ「迷宮にある罠の基本ツスね……」

八幡「行き止まりだな」

リリス「こうなったら…アリンさん!!」

アリン「崩壊の名のもとに上手いこと破壊するわ、魔道書『黄昏の真説』に記載した術式を実行——テイワズ」

神無月が詠唱するとレーザーみたいなのが出てきて鉄球を砕いたアラタ「おおーすげえ!!」

アリン「…私の聖儀術よ」

こいつらが話してるうちに壊れた鉄球で補給つと…

レヴィ「何してるんスか？」

八幡「ほら、魔力用だよ…少しでも節約したいじゃん？」

レヴィ「なるほどっス……興味惹かれるツスね、もつと分かったら教えてくださいつス、貴方には少し期待してるっスから」

そう言い離れていく風間の表情はいつもより本当に期待してるようだった

八幡「さてと…行くか」

八幡「なんか暗くなってきたくないか？誰か明かりとかつけられないのか？」

アリン「私がやるわ——ソウイル」

八幡「おお、光った」

アラタ「しかし便利だなアリンの魔術は」

アリン「そう？」

アラタ「なんか指で描いたり唱えたりするだけで、色んなことができるのか？」

アリン「魔道書に書いておいた術だけ……術式として登録してあるから——エイワズ」

アリン「防御の術……旦那様が影にイタズラされるのは嫌だから」

アラタ「おおーっ、サンキューなアリン!!」

アリン「……うん」

イチヤイチャしてんなー……けっ！リア充が！

そして数分後

レヴィ「さて——そろそろ最深部ツスね」

アラタ「なんか随分歩いたなあ、敵はみんなニンジャがやつつけてくれたから楽だったが」

リリース「あの程度の影では束になってもレヴィさんには適いませんからね」

アリン「…そうね、敵になるとしたら——」
ドンツ

アラタ「うおっ!?!」

壁を壊して出てきたのは…

アキオ「あん？まつすぐ来たのになんで先を越されてんだ？」

ミラ「レヴィさんはこの迷宮に何度も足を踏み入れているからでしょう」

山奈と不動だった……てか真っ直ぐ？

アラタ「まつ…まつすぐ…」

アキオ「ん？ああ……まずは床を破壊してだな——後は一直線に壁を破壊だ!!」

アラタ「…オレそんなケリ受けてよく生きてたな…」

アキオ「さて行きますよアキオ、レヴィさんがここにいることがこの先にユイさんがいる何よりの証明…」

アラタ「いやいやちょっと待って!!行つてユイを殺すんだよな!?!」

ミラ「消滅させるつもりです、崩壊現象の原因ですから」

アラタ「短絡的すぎんだろ!?!」

春日がそう言いながら2人の前に行く

八幡「おい！今のお前じゃやられるだけで終わるぞ!!」

レヴィ「しようがないっスね、アラタさんはまだ銃も使いこなせない素人状態っスからねー」

アキオ「へえ……もしかしてレヴィが相手してくれんのかい？」

レヴィ「こういう熱い展開もちよつと面白いッスよ」

アキオ「確かに!!私もレヴィと1度本気でやってみたかったんだ

よー！」

ミラ「アキオ!!そんな時間は…」

アキオ「どの道ここでレヴィや先生に邪魔されちゃあ勧めないだろ?やるしかねーって!!」

レヴィ「ここは自分が引き受けるんでリリース先生たちは先に行つてくださいつつ、ユイさんを助けられるのはアラタさんだけつスからね」

リリース「…了解しました」アリン「わかったわ…」

八幡「魔道士同士の戦いつてやつ見せてもらいたいから俺は残るわ」

レヴィ「なら多少フォロワーできるならしてほしいツスね!!」

嫉妬のアーカイブに接続——テーマを実行するツス…!!」

レヴィ「神風招来!!」

すっごい風だな…本当にいろんな魔術とかあるんだな。

改めて驚かされる

アラタ「ウサギ…パンツ…?」

ミラ「アアアアキオつ!!!は、早く終わらせてこの不浄な男の眼球をとつと潰してくださいっ!!」

アキオ「……大将は純情だなあー」

リリース「アラタ…!!今のうちに行きましょう」

アラタ「おっおう…八幡気をつけろよー!」

八幡「おーう」

アキオ「暴食のアーカイブに接続、テーマを実行するぜっ!!」

ハルア「八幡様、皆様、お取り込み中申し訳ございませんが…:…:

Dの幻魔の出現を感じしました」

八幡以外「なっ!?!」

八幡「確か危ないやつだよな?」

レヴィ「こんなことやってる暇じゃなさそうっスね」

ミラ「そうですね、倒すのは困難でしょうからやめて行きますか」
アキオ「なーんだつまんねえの」

八幡「はあ…少し見たかった」

始まろうとする戦いはすぐさま終わりました歩くことになり

アキオ「確か八幡？だったよな」

八幡「…ああ、そうだが何か？」

アキオ「お前さんのその魔道書はなんなんだ？」

八幡「カルマリアの写本、だそうだ」

アキオ「…まじか!？」

八幡「ああ…なんか知ってるのか？」

アキオ「…私の故郷ついたらいいのかな、天空図書館ってところに
もう一個あつた気がするよーな…」

八幡「まじ？それなら最初の行き先そこにするか…」

ミラ「…行き先？なにかあるのですか？」

八幡「まあこの魔道書を全部揃えて完成させるんだよ、自分のため
にな…だからこの件が終わったら一度休学させてもらって全部探し
に行く」

レヴィ「さりげなく凄いこと言うツスねー…」

八幡「まあどのぐらいかかるか分からんがな」

そして数分…なんやかんやで話してるうちついたらしい

アキオ「おー!!やってるやってる!!」

ちなみに俺は2人の後ろに隠れてる、風間に隠れてろって言われた
から

アキオ「お邪魔するぜいー」

ミラ「Dの幻魔…本当に顕現してましたか…」

え？何？信じてくれてなかったの？

アラタ「お前ら…八幡とニンジャは…？」

リリス「まさか——お二人は——」

レヴィ「呼ばれて飛び出たツス」

八幡「勝手に殺すなよ」

アリン「一時休戦？」

アキオ「まああんなのが現れちゃ悠長に遊んでられないわな」

ミラ「幻想種の中で最強と謳われるドラゴンの形態をした幻魔…アキオ1人では手に負えない可能性もありますからね」

アキオ「まあな、ちよつくらやってみつけど！」

八幡「大丈夫か春日」

レヴィ「ヤバそうツスね、アラタさん、呼吸を整えて魔道書に意識を集中させるっスよ…そうすればだいぶ楽になるはずっス……どうっスか？」

アラタ「ああ……かなり楽になった……すげえな、バトルマンガみてーだ、てか八幡…お前戦えよ」

八幡「いんや、今の俺じゃ大した攻撃はできんからな、やめておく…めんどいし」

レヴィ「相変わらずブレないツスね…ところでアラタさん……混ぜりたいツスか？」

アラタ「混ぜる…？ニンジャは行かなくていいのか？」

レヴィ「もちろん行くっスよ、ただ…自分はアラタさんにも戦いに参加して欲しいので……八幡さんにも本当は参加して欲しいっスけどね、多分ですが魔力使い慣れてないせいで体がキツイ事になってるハズっす」

八幡「よく分かったな…」

アラタ「じゃあオレはなんで？」

レヴィ「それはアラタさんが魔王候補だからツスね」

アラタ「なるほど全然わからん」

八幡「まあとりあえずやつてみるよ、聖さん？だっけ？探すやら助けるやらするならこんなバトル日常茶飯事なはずだぞ」

アラタ「聖を…探すため…」

八幡「じゃ、風間にあとは任せた」

俺は身体強化を使い少しだけこのバトルに参加する

そして上手いとこだけ春日に持ってかせて自分は目立たない…我ながら完璧な計画だな

数分の間このなんちゃらドラゴンに殴ったりしていたら………
やっとな終わったか

アラタ「そこをどいてくれーっ!!」

アラタ「メテオパニッシャー!!!」

春日が技名を言うところ不思議、凄いのが出てきました

そして色々と終わり帰りの大迷宮内で

アラタ「そういや八幡、お前明日学園出るんだろ？」

八幡「そうだが…」

アラタ「それなら俺と友達になってくれよ!」

八幡「?…まあ構わないがいきなりどうした？」

アラタ「ロクに男もいねーしな、それにお前面白いし飽きないからな!」

八幡「そ、そうか…まあ改めてよろしく?」

アラタ「それと名前で呼んでくれよいい加減に」

八幡「まあいいぞ、アラタ」

うん、男だからキョドらなかつた安心

ぼっちの俺に友達か…ぼっち卒業だな…

アラタ「おう!だからよ…ちゃんと戻ってこいよ」

八幡「わかってる、俺も案外ここは飽きないしな…お前もな」

アラタ「そりゃよかった!」

こいつとなら…見つけられるかもな…

比企谷八幡 side out

春日アラタ side

そして後日

アラタ「起きたら横に裸のロリ巨乳美少女が…ふむ」

リリス「アラター!!いい加減に起きてください!八幡さんの見送り
するのではなかったのですかっ!!」

寝ぼけて完全に忘れてた

アラタ「やっべ!サンキューリリス!」

急いで制服を着て外に出る、外には学園長と八幡が話していた

アラタ「すま——ん!!遅くなった!」

八幡「許してやろう、本当は言うほど待ってないけどな」

ビブリア「さてと八幡くん、キミはちゃんと戻ってくるのだね?」

八幡「ああ、約束するよりぼっちやめた原因の友達がいるからな」

アラタ「お、おうそうだな」

なんだコイツ…いきなり照れることいいやがって…

八幡「まあとりあえず行ってくるわ」

アラタ「死ぬなよ…:ちゃんと強くなって戻ってこいよー!!!」

八幡は背中を向けて歩きながら手を軽く上げて返事をした

ビブリア学園を去って……

俺は——を指す

あれから数日、しばらくずっと歩きっぱなし

天空図書館は場所わからんしとりあえず…学園長が言ってたイシユ・カリオテ・福音探求会・も気になる、とりあえず適当に歩きながら決めるか

……確か学園長がリベル学園方面はヤバいとか言ってたな、確かイシユ・カリオテの本拠地みたいなものだった気が——だからアカーシヤ学園訪ねるか…

1度崩壊現象で壊れた家に自分の必要なもの取りに行ってからアカーシヤ学園だな

……それから半日してやっと家の前に着いた

着いたのはいいんだけどドアが開かないな

八幡「よし、壊すか」

ハルア「開かないなら壊しても良さそうですね、それと報告が……中に魔道士3名と……私が1冊」

八幡「……誰か生きていたのか？小町とか生きてたら1番嬉しいけどあの時割り切ったから会った瞬間抱きしめるまである」

ハルア「…いえ、その可能性は低いと思われます…小町様には魔力の反応が一切なかったのです…」

八幡「さいで——そしたらおかしくねえか？……まあとりあえず壊すか」

犠牲なれ、と石を持って魔術を起動し手を強化しドアを壊す

謎の3人「誰!？」

八幡「いやあ、すまんすまん…まさかの住んでた家に魔道士いるって言うんで驚かそうかと」

??? 「…住んでた家…?」

身長が小さめの人が聞いてきた

八幡「ん? ああ、なんか残ってつかないと…そんな事よりなんで俺の家に魔道士?」

??? 「まさか…: 華花(はなか)、貴女の家族じゃないかしら?」

華花「でも…: 魔道士になれる素質があったのは八幡だけだった気が…: まさか!」

八幡「…華花?…: まさかお袋?」

華花「は…: ち…: まん?」

八幡「あ、ああ…: 比企谷八幡だ」

華花「は」

華花以外「は?」

華花「はぢまああああんっ!!」

急に華花と呼ばれる人が抱きついてきた

…: 本当にお袋…: ? お袋が魔道士…: ?

八幡「お…: お袋なのか…: ?」

華花「親が子を見間違える訳ないじゃないっ!!」

八幡「…: …: 生きててよかった…:」

まさかこんなことが起こるとは…: …: つい泣いてしまった…:」

そして数分して自己紹介がはじまる

アカーシャ「私はアカーシャ、アカーシャ学園の学園長よ…: …: そうね、長いからアカーシャって呼ぶ方が楽だと思うからそうしなさい」

アナスタシア「僕はアナスタシアⅡL、長いからアナって呼んでくれると嬉しいな」

八幡「あ、ハイ…: よろしくお願いします、いつも母がお世話になってます」

アカーシャ「敬語はいらわないわ、硬いのは苦手なの」

華花「これだから合法ロリは性格もロリなのよ」

アカーシャ「…: つ!! あんたねえ!」

アナスタシア「あははは…」

喧嘩始めやがった…

八幡「…アナでいいんだよね？」

アナスタシア「うん、ボクは八幡くんって呼ばせてもらうね」

八幡「あ、ああ…：それよりなんでこんなとこにいたんだ？」

アナスタシア「華花がね、「なんか息子が崩壊現象なる前魔道書持ってたからほかの写本回収してあげたわ、1個だけ…きつと魔道書と一緒に崩壊現象から生きてるでしょ、だからあなた達壊れた家に一緒に行くわよ」って感じで…まあやる事もなかったからいいんだけどこれからはあるんだよね、それを手伝ってもらう条件？みたいなものについてきてる！多分華花は条件なしでも手伝ってくれるんだろうけどね——あ、カルマリアの写本がそこに1冊置いてあるからとつていいよ」

八幡「おう」

手に取った瞬間、俺が持っていた写本と合体した？

八幡「思ってたんだが二人ともお袋の同級生？」

アカーシャ「ええそうよ」アナスタシア「そうだね」

八幡「…：つて事はみそ——」

アカーシャ「それ以上言ったら容赦なく殺すわよ」

八幡「あ、ハイスイマセンデシタ」

アナスタシア「ボクは理由は今は言わないけど一時的に存在が17の時になくなったから現実的な話だと君と同一歳だよ？」

八幡「おお、それはなんか良かった…：なんか気が楽になった気がする」

華花「そうよねー、なんでこいつら成長しないのかしら…：私だけ老けていくわ！」

アカーシャ「それにしてもあなた達ホントに親子つてぐらい似てる性格してるわね…：」

八幡「そんな似てないと思うが…：」華花「ええ、似てないと思うわよ」

アカーシャ「座右の銘は？」

八華「押しでダメなら諦めろ」

見事なシンクロですね、なに？これってお袋から俺に受け継がれてんの？

アナスタシア「一番したくないことは？」

八華「仕事」

……ダメだ、我慢できない

八華「ぷっ……はっはっはっはっ!!」

アカーシャ「笑い方までそっくりじゃない……」

少ししたらアカーシャが真剣な顔つきになった

アカーシャ「貴方はなんでビブリア学園の制服を着てるか尋ねてもいいかしら？」

八幡「あー、それはじゃあいまから説明する……まずは——」

それから崩壊現象から生き残ったこと、魔王候補改めアラタヤトリニテイセブンと会ったなど、全てを話した

アナスタシア「そっか……魔王候補くんはもう居るんだ……」

華花「案外面白くなってきたよ、そうだ八幡……私達と一緒に来ない？」

アナスタシア&アカーシャ「!?!」

八幡「来るってどんな意味だ？仲間になるか少し一緒に行動するか」

華花「後者よ、私個人としては親子として一緒に仲間になってほしいけどしたい事があるんでしょ？」

八幡「流石母親……ってところだな、まあ確かにしたいことはないしな……てかここ寄り終わったらアカーシャ学園いこうと思ってたまである、少し調べ物がしたくてな……ちなみにその情報はうちの学園長の情報な」

アカーシャ「あんのクソメガネ……まあいいわ、許可してあげる」

アナスタシア「じゃあしばらく一緒に行動するって事でいいのかな？」

八幡「ああ、これからよろしく頼む」

比企谷八幡 side out

くその頃のビブリア学園にてく

春日アラタ side

今は俺、リリス、アリン、レヴィ、ユイ、セリナで学園長室にいる
……

リリス「…学園長、急に呼び出してどうされましたか？」

ビブリア「いやあくね…八幡君居たでしょ、その苗字の比企谷ってどこかで聞いたことあるんだよね…どうもあとちよつこのころで思い出せなくて！それで君達と一緒に考えてもらおうと思つてネ」

リリス「完全に私情じゃないですか…!!」

ビブリア「まあまあ普段の事多めに見てるんだからこれぐらいはたのむよ〜リリスちゃん！」

アラタ「つつてもなんか有名な人なのか？魔道士の中で」

レヴィ「比企谷……んー、自分は分かんないかもツスね」

それから数十分困っていると学園長が

ビブリア「ああく!!」

アラタ「なんか分かったのか？」

ビブリア「アラタ君は聞いた事無いかもしれないけど——龍殺しつてるかな？」

レヴィ「…!!まじっスか!?龍殺しの華花っスよね?!

ユイ「ユイは寝てたからよく分からないな〜…」

セリナ「わ、私聞いた事あります！確か……1人で倒すのが困難とされる最上位の龍をお1人で倒された方ですよね?!」

リリス「確か……伝説級の龍、ニーズヘッグを倒し…その際に鱗や色々な部位を持ち帰りその鱗などが魔術の役に立っているんですよ?」

ビブリア「そうそう！華花ちゃんはおつかないよ…今はアカーシャ学園で教師をしてるらしいね」

アラタ「ほえー、八幡の母ちゃんってすごい人だったんだな」

レヴィ「…凄いどころじゃないツス、アラタさん…その息子の八幡

さんはもつと凄くなるかもしれないって事ツスよ、軽くトリニテイセブンなんか越えちゃうぐらいに」

アラタ「まじか……次八幡と会う時が楽しみだ！」

春日アラタ side out

ーそして元に戻りー

比企谷八幡 side

八幡「へつくしっ！」

華花「八幡大丈夫？」

八幡「お、おう……平気だから」

アカーシャ「見てよアナ……あの華花がちゃんと母親してるわよ」
アナスタシア「確かに……あのいつものガサツな華花が……」

八幡「そんなに酷いのか？」

アカーシャ「そりゃあもう酷いわよ、雑務はサボって仕事たまるわ」
アナスタシア「あ、でも生徒達には評判いい——ん——」

一瞬でアナの口を手でおさえた……生徒？

華花「アナ？あんたは少し喋りすぎよ？」

八幡「ちよつと待て……生徒？……もしかしなくてもお袋って教師やってるのか？」

アカーシャ「ええ、信じられないだろうけどそうなの……はあ……あんなに上手く教えられるなんて意外だったわ……できてなかったらおちよくろうと思ったのに」

華花「おちよくる？あんた私に1度も口喧嘩勝てたことないのに何言ってるのよ笑わせないで……プツ」

アカーシャ「それはたまたまよ！」

華花「そんなたまたまが続くかしらー？」

また始めやがった……もういいアナに聞くか

八幡「なあアナ……お袋って教師の前は何やってたんだ？」

アナスタシア「普通に魔道士やってたよ、あつ！でも華花って結構

有名なんだよ？」

八幡「そうには見えないんだが……」

アナスタシア「まあ元があれだからね……でも2つ名もあって確か……龍殺しの華花！ 依頼でたまたま遭遇したニーズヘッグと対峙して勝っちゃったんだよ」

八幡「……………これからお袋には生意気言わないようにしよう」

八幡「それとなんで俺がカルマリアの写本持つてる事を知ってたんだ？」

アナスタシア「それは華花がここに崩壊現象になる前に帰ってきた時に魔力を感じて君の部屋を覗いたら八幡君がカルマリアの写本を持って……その時の華花凄いなだよ！ 息子のためだーって言ってカルマリアの写本を探し回ってたんだよ……………あつ、これ内緒って言われてたんだ」

えへへ、と笑いながら誤魔化す……なんか可愛いな、もしかして天使かな？ ……きつとお袋はこの笑顔にやられたのか色々。

そして後ろを向くと……

顔を真っ赤にしたお袋とニヤニヤしてるアーシャ

華花「嫉妬のアーカイブに接続、テーマを実行する」

アナスタシア「は、華花？ 何をしようとしてるのかな？」

華花「アナは1回痛い目合わないと分からないのよね？」

ニコニコしながらアナの方にだんだん近づく

アナスタシア「は、八幡君っ！ 助けて！」

俺の後ろに隠れた

やばい、近い、天使

八幡「な、なあお袋？ やめよう？」

華花「……………八幡が言うなら」

そう言いお袋が魔力を解いた

アカーシャ「貴女息子にとことん甘いのね……」

八幡「……確かに……親父が俺に酷い印象が凄かったからよーく思い返せばお袋俺に甘いな」

アナスタシア「ずっと八幡君の話ばかりかしてたもんね」

八幡「え？それはそれで恥ずいんだが…」

アカーシャ「さつ、そんな事はどーでもいいからさつさと転移して学園に戻っちゃいませよ」

アーシヤが指をパチンツと鳴らし場所が変わる

八幡「うわ、すっげ」

アカーシャ「ここが私の学園、アカーシャ学園よ！」

それからアーシヤから色々な説明を受けて今は学園内の図書館でめぼしい本を取って読んで漁つてを繰り返している

八幡「ん…：…はあー…」

アナスタシア「お疲れ様」

天使が隣に座ってきた

八幡「おう、なんか用か？」

アナスタシア「特に用はないよ、君と話したかっただけ」

おっとそれはついうっかり勘違いさせちゃうアレですね分かりませす

だが訓練されたぼっちはこんな手に引つかからない

八幡「…俺と話しても面白い事なんかないぞ」

アナスタシア「僕が話したいんだ、ダメ…かな？」

八幡「もちろん喜んで」

上目遣いについて反射的に答えてしまった…：…八幡一生の不覚

アナスタシア「じゃあ八幡君のテーマは何？」

八幡「いきなりぶっ込んでくるな…：…犠牲だよ犠牲」

アナスタシア「…：…犠牲？なんでそれにしたの？」

八幡「今まで自分を犠牲にしてきたからな、だからこれだ」

アナスタシア「そう…：…なんだ、辛くない？」

八幡「同情ならやめてくれ、これはそう簡単に背負わせていいもんじゃない…：俺自身の問題だからな」

アナスタシア「…ごめん…：…でもよく考えてるんだね、凄いいよ」

八幡「…そ、そうか」

くそ、なんかやりづらい

アナスタシア「え、えつと…犠牲って事はアーカイブは色欲だよね？」

八幡「そ、そうだが…変だったか？」

アナスタシア「ううん、僕も色欲だよ…テーマは終焉」

八幡「そうなのか…終焉？…失われ——」

失われたテーマと言おうとしたら手で口を抑えられた…こう
いった行動やめてもらえませんか？恥ずかしいんですけど…

アナスタシア「静かに、あまり知ってる人いないから！」

わかったから手を離してくれ、と用意してあったメモ帳に書いてそ
れを見せると離してくれた

アナスタシア「ご、ごめん…」

八幡「いや…俺もよく考えてなかった、悪い」

「……………」

なんとも言えない空気になってしまった

とか思ってたらアナが口を開いた

アナスタシア「そ、そうだ！僕がこの学園を案内してあげるよ！」

八幡「いや、別に…」

アナスタシア「いいから行こ！」

アナが俺が読もうと思っていた本を俺が持ってきた鞆にしまい俺
の手を引く…結構強引ですね？

これからどうなることやら…

俺は——を指摘す②

それからアナに連れられ学園内を無理矢理案内され、今はアナの部屋にいる……やばい女の子の部屋とか初めてなんだけど

アナスタシア「どうだった？」

八幡「どうだったって聞かれてもなあ……無理矢理連れられたただけだから特になんとも」

アナスタシア「そ、そっか……そうだよね……ごめん」
やめて！そんな涙目にならないでっ！

八幡「とか思ったけどまあ良かった」

アナスタシア「ほんと!?……それは良かった」

いい笑顔、やっぱり笑顔が1番です

アナスタシア「そう言えばさ……君のテーマ、犠牲って聞いたことないんだけど」

八幡「俺もそこら辺はさっぱりだ、だからなにか知ってそうなハルアに聞こうと思ってるんだが忘れててな」

アナスタシア「あはは……忘れてたんだ……」

八幡「この際だ、一緒に聞くか？」

アナスタシア「い、いいの？君の研究テーマなんでしょ？独り占めとか思わないの？」

八幡「独り占めって言っても俺しかこのテーマ使ってるやついなさそうだしな、後はまだ会って短いがお袋の知り合いだからな、信用できてる気がするだけだ……」

アナスタシア「……そうかな？……えへへ、ありがとっ」

思い返すと普段の俺からは言わなそうだし恥ずいな……まああんな顔されたらそう言うしかないか……

八幡「じゃあハルア、頼んでいいか？聞いてたんだろ？」

ハルア「……はい、聞いてました」

ハルアが人型になり、その表情はいつもより暗かった

ハルア「正直あまりいいものではありません……それでも聞きますか

？」

八幡「ああ、俺に大切なことだろうからな……」

ハルア「では話しますね……まず、私は犠牲のテーマを選ぶ人として契約ができません」

八幡「……それはどういう事だ？」

ハルア「……最初の頃八幡様が言いましたよね、なぜかこの本が気になって買ったと……それは犠牲のテーマをこれから選ぶ人を引き寄せるようなモノがこの私、魔道書にはあります……ですが犠牲のテーマに相応しい人は数百年と現れてきませんでした、それからしばらく彷徨っていたらやっと……やっと、居たんです」

八幡「それが俺なのか？」

ハルア「……はい、ちゃんと犠牲のテーマの始祖もいます、ですが何百年も前なのでそれが知らされていたわけではありません……」

アナスタシア「八幡君の始祖は誰なの？」

ハルア「……オルレアンの聖女、ジャンヌ・ダルク様です」

2人「!？」

八幡「ジャンヌってあのジャンヌなのか？」

ハルア「はい、私の産みの親……と言ってもいいですかもね」

八幡「……じゃああの殺され方は事実なのか？」

ハルア「はい、確かに事実です……ですがその時に決死の覚悟で自らを魔術で犠牲にし……犠牲のテーマの最終到達点、・傍観者・にギリギリでなりました」

アナスタシア「……傍観者って本当なのかい……!？」

ハルア「は、はい……」

八幡「傍観者ってのはまずなんだ？」

ハルア「傍観者……それは世界の守護者の様なものです、ただ……世界を乱すものが居たらその場所に転移をしてその人を殺すなどをして世界を安定させる役割を持つモノです」

八幡「……それで今はジャンヌは？」

ハルア「……世界に縛り付けられています、乱すものを殺すのを戸惑い、気絶だけさせて戻るを繰り返しているうちに役割を果たせてない

というので傍観者と言う役割に心が侵食されつつあります…
アナスタシア「……………ハルアさんとしてはどうしたいの？」

ハルア「……………い」

八幡「はつきり言え…今のお前の主は俺だ」

ハルア「…助けたいです…!!お母様が苦しめられているところなんて感じ取りたくありません…!!」

八幡「…助け方はあるのか？」

ハルア「…八幡様が強くなり…あと一つの私を見つけ、完成させて私が描く魔道陣に八幡様が魔力を注ぎ込めば…私のしたい事は終わりです…ですが八幡様にも…危険が——」

八幡「そんなぐらいい主である俺にさせてくれよ、な？たまにはカツコつけさせてくれ…」

ハルアが泣いているので小町にしてたように、立ち上がり慰めるようにハルアの頭を撫でる

ハルア「あ…ありがとうございますっ…！本当に…ありがとうございます…います…！…」

そう言いながらハルアが泣き顔を見られたくないのか胸に顔をうずめるように抱きついてきた

八幡「ああ、それぐらい背負わせてくれ…」

それから数分後

ハルア「み…みつともない姿をおみせしました……………」

ハルアの顔が真っ赤だ

八幡「…まあ気にすんな、とりあえず落ち着くために魔道書に戻れよ」

ハルア「はい…」

魔道書に戻り、次は俺の番だと思いアナに聞く

八幡「…さてと、次はアナがなんか話してくれよ」

アナスタシア「ほ、僕？…そうだね、こんなこと聞いちゃったんだ、僕の事も話すよ…僕はね———だったんだ」

それからしばらくアナの事を聞いたり俺の事も話した
そうか、そうだったのか…

八幡「…俺の立場的にどうすればいいのか分からなくなってきた」

アナスタシア「…その時の判断は君に任せるよ、僕は君を恨んだりしないから…だけど…さ、もし…何かあったら…助けて欲しいかなんて」

八幡「…わかった、約束する…だからその変わり…その、なんだ…こんなにお互い話して知ったんだ、俺と友達にならないか？アナとなら仲良くやれそうな気がしてな…」

アナスタシア「…う、うん!!僕でよければ…友達になりたいな」

八幡「…アナと友達になりたいんだ、上っ面の関係とか俺はあまり好きじゃないからな…」

アナスタシア「…そうなんだ、なんか嬉しいな」

これからは少しでも積極的になろうと思うよ…小町

こないない奴らがいっぱい居るからな…

八幡「それじゃ俺はもう行くわ」

立って部屋を出ようとしたら

アナスタシア「…」

アナが俺の腕を掴んでいた

比企谷八幡 side out

アナスタシア side

あ…あれ？

なんで今八幡君の腕を掴んじゃったんだろ…

と、とりあえず

アナスタシア「ご、ごめん!」

八幡「い、いや構わない」

八幡君顔赤いな、思った以上に純情?…いじりたくなっちゃうな

アナスタシア「それじゃあさ、僕も一緒に行くよ」

そのまま腕に抱きついてみる

これは思った以上に恥ずかしいな。

八幡「…わ、わかった…とりあえず離してくれ…」
やっぱ顔赤いな、可愛い♪

アナスタシア「じゃあ…手、繋ぐ?」

八幡「いや…なんで?普通に恥ずかしいし目立つから嫌なんだけ
ど…」

アナスタシア「繋いでくれないと…ここで痴漢って叫ぶよ?」

これは流石にやり過ぎかな?

八幡「分かりました、繋ぐのでそれだけは辞めてください」
変わり身早い!華花とそういうところは似てるんだね。

八幡「と、とりあえず学園長室まで行くだけだから…それまでな。」

アナスタシア「うん!」

アーシャに何かはなしがあるのか?まあいいや

アナスタシア side out

比企谷八幡 side

なに?なんなのこの子。

絶対俺をいじってるでしょ、楽しそうだし。

それから少しして学園長室前、扉をノックして

アカーシャ「入っていいわよ」

許可が出たので入る

ったあれ?今って…

アナスタシア「八幡君に着いてきたー!」

アカーシャ「ここは遊びに来るところじゃないの…って言ってもア
ナだけっぽいわね、それにしてもその手は?」

アーシャがニヤニヤしている、何その顔超ウザイ

アナスタシア「仲良くなったから手繋いでただけだから!!」

顔を真っ赤にしてアナが手を離す

手汗とか大丈夫だったかな?めっちゃ不安

アカーシャ「まあいいわ、それで?何か用?」

八幡「いや…今住むところも何も無いんですよ、それでどうしたら

いいかなーって思ってますね……」

アカーシャ「そんなこと？しばらく行動一緒にするんだからそれぐらい用意してあるわよ、寮の部屋が空いてるからそこ使っていいわよ、確か……アナの隣の部屋だったわ」

八幡「まじか、そりや助かる……悪いな」

アカーシャ「いいのよそれぐらい、なんたって華花の子供だもの」

八幡「見た目に反して随分と男前だな」

おっと心の声が

アカーシャ「本当に華花と似てるわね……」

アナスタシア「確かに似てるね……」

八幡「……そんなに似てるのか？」

アカーシャ「ええ、思考が似てるの」

八幡「ほーん、まあいいや……とりあえず、しばらくここに居られるなら気楽に修行とかもできそうだから感謝する？」

アカーシャ「なぜ疑問形なのは分からないけど、ええ、気楽にどうぞ」

八幡「とりあえず俺は魔道書と修行の仕方とか模索してるわ」

そう言い残して学園長室を出た

比企谷八幡 side out

アナスタシア side

アナスタシア「ねえ、アーシャ」

アカーシャ「どうしたのアナ？そんな真剣な表情しちゃって」

アナスタシア「八幡君……きつと傍観者って言うのになるつもりだよ」

アカーシャ「まず傍観者ってなに？ちゃんと順を追って説明しないと分からないわよ」

アナスタシア「……ご、ごめん……すこし考えてたんだ……話すね……傍観者って言うのは——」

八幡君の傍観者、テーマ、魔道書について全て話した

八幡君がどこかに行ってしまうそうで怖いから……友達がいなくなるなんて嫌だからね。

アカーシヤ「……華花に話した方が良さそうね……でも、華花は今長期の任務に丁度行っちゃったのよ……どうしたらいいのかしら……」
アナスタシア「……そ、そうだ！僕はアレが始まるまでもう特に何もすることないし八幡君の事見てようか？」

アカーシヤ「……そうね、そうしましょう」

アナスタシア「うん！じゃあ僕は行ってくるね」

そう言い僕は学園長室を出て八幡君の部屋に向かった

そして今八幡君の部屋の前にいる

アナスタシア「八幡くーん！」

返事がない……

アナスタシア「寝てるのー？」

大丈夫かな？

そう思いドアノブに手をかけて開けようとする

ガチャツ

アナスタシア「え？開いちゃった……まったく無用心だなー

………」

と思つたら居なかった、あれー？どこに行つたんだ？

そう思い部屋を見回すと机に置き手紙があつた

八幡『近くの森で修行、2週間ほど帰らない予定』

アナスタシア「………行動が速すぎる、華花より酷いよ……そうやって先に行つちやうんだもん……でも近くの森だよ？それなら驚かせるために色々準備するから……三日後に行こう！」

それから三日後

アナスタシア「よしっ！行こう！」

それからしばらく歩いて森の中に入る

アナスタシア「僕この森嫌いなんだよなあ……虫とかいっぱいいるし……」

アナスタシア「はあ……ここまで来たから頑張るしかないか……」

それからしばらく歩いてると……

アナスタシア「何これっ!?なんでここら辺の岩や植物綺麗に無くなってるの!?!」

広い範囲が更地になっていた

アナスタシア「八幡君は一体何をしてるの……」

また少し進むと人がいた

アナスタシア「…あれは、八幡君?」

ズボンだけしか着ていない八幡君が居た

アナスタシア「…なにやってるのかな?」

まわりにある岩より大きめの岩に触れて魔術を発動してる、そして

…

アナスタシア「岩が消えた…?どういう事なの?……」

そう思い思考してると

八幡君が血を吐いたり体に傷が何もしてないのにできたりしてる

アナスタシア「ちよつと!なにしてるのっ!!」

急いで八幡君に駆け寄る

そしたら僕の目の前までの生えていた植物が消えた

すると八幡君の傷が治っていく

アナスタシア「…は、八幡…くん?なにしてるの…?」

驚きすぎて言葉がちやんと出ない

八幡「ん?アナか、まあな、強制的に自分の体を強くさせてるつつつたら良いのか…んー、説明すんのめんどいな…つかなんでここに居るんだ?」

アナスタシア「八幡君の様子を見に来ただけだよ?置き手紙、あつたからね…:それで?説明してくれない?納得できる説明しないと僕がずっと様子を見ています」

八幡「わ、わかった説明する」

即答した…

そんなに僕といえるの嫌なのかな？」

八幡「…嫌とかじゃなくてだな、その…女子は風呂とか入らないとダメだろ？」

どうやら声にでてたみたいだ…

アナスタシア「あ、そうだね…：ありがとう」

ちゃんと気をつかってくれるんだ…：なんだか勘違いした自分が恥ずかしいな

八幡「とりあえず説明すればいいんだろ？」

アナスタシア「うん！」

八幡「…まずな、俺の魔術について説明するわ——俺の魔術は何かを犠牲するとそのモノと質量によって能力が変わるんだよ、見たと思うが岩だと身体強化、身体強化が終わると身体に合わなかった分ダメージを食らうんだよ…：だけど体が強くなったら多分だが筋肉痛だけになるんだよ」

アナスタシア「でもそれって岩の大きさ変わるわけだから身体が危なくない…？」

八幡「それは大丈夫だ、ハルアがいるからな、ちゃんと体がギリギリ耐えられるものを選んでもらってる」

アナスタシア「それはそれで結構危険だよ…」

本当に危なっかしいなあ…：昔の華花みたい…

アナスタシア「それで？傷が治ってたのは？」

八幡「俺の周りの植物とか無くなっただろ？植物の類の効果は傷を治すんだよ、それで身体強化で無理矢理体を壊して治してって繰り返ししてた」

アナスタシア「…大丈夫なの？辛くない？」

八幡「まあ辛くないって言ったら嘘になるけど強くなるためにならな…：それに今は守りたいものもできちゃったしな…」

アナスタシア「八幡君ってき…：強いよね」

八幡「俺なんかまだまだだ、もっと強くならんとな」

アナスタシア「そうかな…：あつ…：そういえばさ！…：ご飯作ってきたんだけど…：食べてくれるかな？」

そう言い手に持っているバスケットを見せる
結構自信作なんだけど……

八幡「…ま、まじ？」

アナスタシア「うん、まじだよ」

八幡「アナ様天使様……」

ふえっ……？

アナスタシア「き、急にどうしたの？」

八幡「いやー、腹減っててな、すっごい助かるわ、ほんとマジで助かる」

アナスタシア「もう……はい、これ」

八幡「おう、悪いな」

アナスタシア「違うよ、そういう時はありがとうでいいの」

八幡「そ、そうか……あ、ありがとう……」

サンドイッチとかいっぱい作ってきたからね

……あれ？なんか恋人みたい……っで違う違う！

僕は一体何を考えてるんだ……

八幡「どうしたんだ？急に手なんか振って」

アナスタシア「……うん、なんでもない」

これじゃあ僕が八幡君を異性として見てるみたいじゃないか……

八幡君と僕は友達だからね、そう、友達だから……

決して三日前のあのハルアさんにやってた事がかつこいいとか
思っていない思ってたな——はあ……無理そうだね、どうやら僕は八幡君
が気になってるみたいだ

これから話してく上でちゃんと考えてみよう……

恋とかちゃんとしたことないしね……

でもそしたら魔王候補くんえの気持ちは偽物なのかな……

あーもう！なんかやだ！考えるのやめよう！

八幡「ご馳走様」

アナスタシア「……え？もう食べ終わったの？」

八幡「もうって……どうしたんだ？10分は経ってるぞ多分」

はあ……1人でずっと思考えてんだか……

アナスタシア「ごめんね、少し考え事してて…」

八幡「大丈夫か？聞くぐらいならできるが…」

アナスタシア「ううん、本当に大丈夫」

君の事だから本人にそのまま言っちゃうとか急すぎだしまだ分かんないからね…

八幡「マジで？さつきから顔赤くなったり真剣な顔したりちよつと怖いぞ……」

……もうやだ

アナスタシア「ほ、本当に大丈夫だから！これ以上詮索したらダメだよ……？」

八幡「お、おう…まあ話したくなったら適当に言えよ…」

それからしばらくして夕方になって

アナスタシア「じゃあ僕は帰るね、また明日」

八幡「おう、またな」

そして帰って今はアーシャと一緒にいる

はあ…恋ってよく分からないな

アカーシャ「……ナ！アナ！」

アナスタシア「ん？どうしたのアーシャ」

アカーシャ「ん？じゃないわよ、今日ずっとぼーっとしてるけど大丈夫なの？」

アナスタシア「な、なんでもないから!!ちよつとね」

アカーシャ「もしかして、八幡と何かあったの？」

…アーシャ、ニヤニヤしてる、絶対楽しんでる

アナスタシア「……」

何も言葉が出てこなかった

アカーシャ「どうやら当たりみたいね、それで？何があったのか話してみなさいよ、親友でしょ？」

アナスタシア「……う、うん…わかった…えつとね——」

全て話した……よく分かんないからしようがないよね

アカーシャ「へー、そんなことがあったの」

アナスタシア「聞いてきた割にはなんとも思っただね……」

アカーシャ「そりやそうじゃない、アナったら話してる途中ずっと夢中だったわよ?」

アナスタシア「…へ?」

どうしよう、否定できない……

アカーシャ「ほら、顔真っ赤じゃない、それが証拠よ」

アナスタシア「い、いや……これはなんと言いますか……」

アカーシャ「ま、ちゃんとそこは自分で決めなさいよ……じやなきや後悔すると思うから」

アカーシャがそのまま去っていった……

はあ……これからどう八幡君と接すればいいんだろ……

俺は——を日指す 終

あれから数週間、八幡君はずっと森にこもっていた

八幡君と話すのは楽しいし何より八幡君といるのは楽しいから……だから僕は毎日ご飯を届けた

これが恋なのかな

そして今彼が言うに今日で戻ってくるらしい

八幡「どうしたんだ？」

アナスタシア「なんでもないよ」

どうやらこの数瞬間で僕のことがかんがわかってきたのか考え事とかしてる時によく聞いてくる

人間観察が得意とか言ってたからそのせいかもね……あはは……

アナスタシア「そういえば八幡君ってずっと森にいて、お風呂とか入ってないのに臭くないよね？」

八幡「ああ、それはな……植物を犠牲にすると傷とか治せるつつたろ？それが他にもできて体の汚れとかとってくれるんだよ」

アナスタシア「なんか……変に便利っていうか……すごいね」

八幡「まあそうだな、あとは岩を犠牲にすると身体強化できるだろ？それが体のどこかだけを強化する事もできる、しかもその残った力は温存できるという特典付きでな」

アナスタシア「へー、なんか八幡君って本当に強くなってるって感じするから納得できる」

この前『なんで僕にこんなに自分の魔道の事話してくれるの？』って言ったたら『アナは……信頼できる奴だと思って思ったから』と言われてその日はベッドで悶えてしまった……ではなくて、こんなに信頼されて嬉しいな

八幡「まあ戻ってもまたすぐ行っちゃうけどな」

アナスタシア「写本の回収しなきゃいけないんだよね？ジャンヌさんを助けるために」

八幡「回収したらすぐ戻ってくるけどな」

アナスタシア「なんで？」

八幡「ジャンヌ・ダルクを呼ぶ儀式みたいなのはここら辺でやるつもりだから、近いから」

アナスタシア「それ絶対最後本音だよね」

八幡「と、とりあえず帰ろうぜ…早く戻って休みたい」

アナスタシア「うん、そうしようか」

八幡君も僕の事を分かっているように僕も分かるようになってきてるんだよ

と言っても今のは誰でもわかるね

それからしばらくして夜になり学園について八幡君の部屋にいる

アナスタシア「今日休んで明日、行くんだよね」

八幡「まあそうなんだが…なぜそんな普通にしれつと俺の部屋に入ってきてんの？」

アナスタシア「暇だから！…ダメだった？」

八幡「…ぐっ…わ、わかった」

アナスタシア「ありがと」

それから他愛もない話をして僕は自分の部屋に戻った

アナスタシア side out

比企谷八幡 side

おはようございます、今日から僕、決死の覚悟で出かけてくるぞ！

…やめよう、なんかキモい

さてと、準備してさっさと行きますかね

準備をして外に出る

すると外に…

アナスタシア「ねえ、なんで何も言わないで行こうとしたのかな？」

なんか怖いっス…おつとついつい風間みたいになつたな

八幡「別に戻ってくるからいいかと…多分」

アナスタシア「ちゃんと戻ってくるんだよ?——あ、ちよつと待って」

八幡「なんだ?」

アナスタシア「八幡君に精霊の加護があらんことを」

目の前でなにか唱えてくれた

八幡「なんかしてくれたのか?」

アナスタシア「うん!危なくなったらその精霊に魔力を込めてね」

八幡「お、おう……とりあえず行ってくる」

アナスタシア「行つてらっしゃいっ」

本当に良い奴だな……

それから数日後、座標の更地に着きました

そしたらおつと……

八幡「な、なんだこれええええー!!」

上から変なビームが降つてきて

八幡「わああ」

なんとということでしょう、あそこがここに來れる起点だつそうです
楽出来て良かった

八幡「はあ……さっさと探すか」

ハルア「八幡様、侵入者用のトラップのようなものがいくつもあり

ますが……どうしますか?」

と思つたらハルアが魔道書の状態で話しかけてきた

八幡「……まじか……それなら、・サクリファイス・」

ハルア「ご自身の存在を薄めたんですね」

八幡「おう、そうゆうことだ」

俺は修行中、術式の詠唱だけである程度発動出来るようになった

そしてしばらく歩いていると

八幡「なあ……あいつどう見ても怪しいよな?」

ハルア「は、はい……キョロキョロしてますね……」

八幡「喋りかけてみるか……」

存在感を戻し眼帯の子に話しかける

八幡「おい、こんなところで何してんだ……?」

???「……何者っ!」

八幡「いや、お前の方が何者!だから……いや?俺はここにある意味盗みに来たから何者なのか?」

???「あつ……盗みに来たのですね、それなら当機と同じです」

八幡「まじで?」

???「はい、マジです」

八幡「じゃあ協力しないか?お互いのお目当て探すって言う」

???「そうですね、当機も無駄な魔力は使いたくないので了解しました」

八幡「おう、俺は比企谷八幡だ」

???「当機はかの光神ルীগです」

八幡「確かに嘘はついてなさそうだが……そのかの光神様が盗みつて……」

ルীগ「当機はお宝が大好きなので」

八幡「なるほど、納得した……あんた嫉妬のアーカイブだろ……」

ルীগ「おお、お見事、貴方は……なんでもないです」

八幡「おい、そこは考えろよ……」

ルীগ「そんな事より早くお宝探しましょう」

こいつ……自由だな

そして少しして

八幡「よし、1度二手に別れよう」

ルীগ「確かに広いですね、そうしておきましょう」

そうして俺はルীগと別れた

比企谷八幡 side out

ルীগ side

なんなのでしようあの人は……魔力は感じられなかったのですが、な

んとなくですが戦っちゃダメな気がしますので当機は頑張つて生き残ろうと思います

そして帰ったらマスター・リベルに報告ですね

ルーグ side out

比企谷八幡 side

ルーグと別れて少しして

八幡「なあハルア、どこにあるか分かるのか？」

ハルア「はい、なんとなくは…だんだん探知が出来るようになってきてますので…」

八幡「うーん、適当に進むか」

そんなこんなで適当に進んでたら

八幡「本がいつぱいだな…」

やばいな、何冊か持ち帰るか

ハルア「八幡様！あそこにあります！」

ハルアが急に人の形になり、ある場所を指さした

八幡「どれどれ？」

写本があるところに行きその本を触り

八幡「やっぱこれすげえな…」

魔道書が融合するのは何度見ても凄いよな…

そんな事を思っていたら魔道書が光、人型になった

………めっちゃ綺麗なお姉さんになってるやん…胸は…まあ頑張れよ

ハルア「八幡様、多少は長い付き合いです、考えがわかることをお忘れならないように」

こっわ、ハルアこっわ！

八幡「そ、それで？なんで急に人型に？」

ハルア「そうですね…短期間で完成になった副作用みたいなものです」

八幡「な、なるほど……とりあえずルーグ探すか」

そう思い外に出る

てかなんか途中で旗みたいのあった
多分使えるかもと思い持って帰ることにした
外に出て前を何かが一瞬通り過ぎた
と思ったら戻ってきた

ルーグ「おや、どうやらそちらも終わったようですね、それでは当
機はお宝を回収したのでさようなら」

はっや！

絶対あいつ逃げ足速いな…

俺もそろそろ行かないと…

ハルア「八幡様、アナスタシアさんから授かった精霊に魔力を込め
見てください」

八幡「ん？おお」

魔力を込めてみると体が浮いた

ハルア「やはりそうですね、それでは背中失礼します」

おい、なぜおんぶせにやならん…：当たる当たる…：当たらない、
なんかごめん

八幡「そ、それじゃあ行くか」

それからしばらくして

ハルア「八幡様、速くできますがどうしますか？」

八幡「あー：速くするか、そうしてくれ」

ハルア「了解しました」

おー、丁度いい速さ

アカーシャ学園に戻ってきた

思いのほか簡単に終わってしまった…：アナがやるところ見た
いって言っただし言いに行くか

八幡「アナ、帰ったぞー」

アナスタシア「八幡君!？」

勢いよく扉を開けてきた

抱きついてきた………は？

八幡「お、おいアナ？どうした？」

アナスタシア「心配したんだから！……本当に良かったあ……」
抱きつかれるのは抱きつかれるで色々アレなんだが……

それより……

八幡「な、なあアナ……お前に露出する趣味とかあったりしたか？」
どうやら着替え途中で上半身は何も着てない模様……

抱きついてきてるから何も見えないけどね？残念とか思っていない
思っていない

アナスタシア「っ!?!ちよ……ちちちちちよっと待ってて!!」

アナが急いで扉を閉めて戻って行った

そして数分後

アナスタシア「ご、ごめんね、感極まっちゃって……つい……何も考え
ずに……」

八幡「まあ元はと言えば急に呼んだ俺も俺だしな、お互い悪いって
ことで」

アナスタシア「う、うん——コホン………えっと、もうしに行く
の？」

八幡「ああ、はやく解放してやらんとな」

アナスタシア「そうだね、早く行こうか」

ハルア「はい、行きましょう」

アナスタシア「ハルアさん……さつきは急いでたから気づかなかった
けどなんか凄い大人びてない……？」

ハルア「はい、完成した私はこうなります」

ピースしながら言ってる、なんか珍しいな

八幡「とりあえずさつきと行こうぜ」

アナスタシア「あ、ちよっと待って……アーシャも呼ぶね」

八幡「おう、じゃあ先行って待ってるわ」

アナスタシア「うん！」

しばらくして森の中……まあこの前更地にしたところで今はアナとアーシヤを待つてる

アカーシヤ「待たせたわねー!」

2人が来た、やつぱりアーシヤは子供みたい、てか子供で良くね?

八幡「それじゃあ2人も来たし始めるか」

アカーシヤ「危なくなったら手を出させてもらおうから」

アナスタシア「頑張つて!」

八幡「おう」

ハルア「では始めましょう」

八幡「おう……色欲のアーカイブに接続、テーマを実行する」

やつぱ、久しぶりになつたけど体軽いな

ハルア「私と合わせてください……今ここに再来せよ」

八幡「そして……我が血を犠牲に、そこに望むものの姿を現せ」

……こりや終わつたら貧血だ倒れるな

???「……私は傍観者、ジャンヌ・ダルクを呼んだのは何者、今す

ぐ答えなさい」

ハルア「お……お母様!」

ジャンヌ「も……もしかして……マリアなのですか?」

ハルア「……はいっ!!マリアです!」

ジャンヌ「……マリア!!」

ジャンヌとハルアは抱きしめ合う、本当の家族のように……
少して

ジャンヌ「……す、すみません……お見苦しいところを……」

アカーシヤ「いえ、大丈夫よ……にしても貴女があ有名な聖女

ねー……」

おい、それ失礼だろ、ジャンヌさん困つてるぞ

ジャンヌ「……あ、あの……私を呼び出したのはどの方で?」

八幡とジャンヌ以外「あの人」

ジャンヌ「なぜ……呼び出したのでしょうか?」

八幡「まああいつが助けっつてお願いしてきたからな、あいつの主だし当然つちや当然じゃないか？」

ジャンヌ「…なるほど——この場で傍観者になるおつもりですか？」

八幡「まあそうだな」

ジャンヌ「……やっと私は……」

アナスタシア「だけど……そのままだと消えちゃわないかな？」

アナが真剣な顔をして言う

たしかにそれも考えたが予想済み

八幡「これと融合してもらうってのはどうだ？」

拾ってきた旗を見せる

ジャンヌ「…これは…私が使っていたのにそっくりですね」

八幡「え？マジで？てかどうする？」

ジャンヌ「そうですね…正直実体が持てるならと思いますのでお願いします」

八幡「早速やるか……」

今にも貧血で倒れそう…早く終わらせないと…

ジャンヌ「では私がお教えますね、まずは——」

それから傍観者になる説明を受けた

どうやらジャンヌが認めればできるそうだ

ジャンヌ「——さて、始めましょう」

八幡「おう、頼む」

ジャンヌ「——我が任は終わり、今ここに新たな者に託す——

——新なる者の名は比企谷八幡、後継者たる資格あり——今ここに

!!我が任は解かれた！」

ゾワツ……凄……これが……これが……

ハルア「八幡様！お母様を旗に！」

危ねえ、倒れるところだった……

八幡「お……おう！——ジャンヌ・ダルク、汝の魂の行く先は今決められる——!!」

ジャンヌが旗の中に消えていく
やばい…フラフラする……………
バタツ

八幡「知らない天井だ」

アナスタシア「起きたの!？」

八幡「ん?おう……………何時間ぐらい寝てた?」

アナスタシア「馬鹿!何時間じゃないよっ!!5日寝てたんだから
!」

目尻に涙を溜めた目でアナが見てくる

八幡「そ、そうか……………その、ありがとな、見てくれてて」

アナスタシア「…え?なんで…わかったの?」

八幡「髪、ボサボサだろ」

あつ、アナの顔が真っ赤になった

アナスタシア「…うん、心配したんだからね」

八幡「…すまん」

アナスタシア「うん、僕は優しいから許してあげる!」

八幡「自分で優しいって…」

いや、確かに優しいんだけどね?

アナスタシア「だから、今度何かなんでも1つ言うこと聞いてね」

八幡「は?いやそれはちが——」

アナスタシア「…何か言った?」

その笑顔怖いからやめて!

八幡「いえなにも、了解しました」

俺よっわ!

八幡「にしても終わったから学園戻らないとな…」

アナスタシア「そっか…」

もしかしてこの子俺がいなくなって寂しいとか言ってくれるの?

アナスタシア「寂しくなるな……………」

八幡「ま、まあまた会えるから平気だろ」

アナスタシア「そうだね、その時になったら会えるよ」

八幡「おう、じゃあ早速準備しないとな…」

アナスタシア「ダメ！あと一日はじつとしてないと体の安全とか分らないから…ね？」

八幡「…あ、ああ…分かったから手を離してくれ…」

こいつ無自覚でやってるから怖いんだよなあ…

男子を勘違いさせる行動はやめましょう

アナスタシア「…ご、ごめん」

顔を赤くしながら手を離す

やっぱり怒ってんのか？

トントン

お、ナイスタイミング

八幡「どうぞ」

ハルア&ジャンヌ「失礼します」

八幡「2人してどうした？」

ハルア「話さなければいけない事があります」

八幡「なんだ？」

ハルア「八幡様、武装との契約で嬉しい誤算がありました」

武装って言うのかアレ…どうみても旗だったろ…

八幡「嬉しい誤算？」

ジャンヌ「私から説明させてもらいます——八幡様は私が元々所持していたテーマのもう1つ、**本能**をどうやら自動的に受け継いだようです」

八幡「という事は…テーマが増えたってことだよな？」

ジャンヌ「はい、そうです…それと…役目から助けていただきありがとうございます…」

八幡「いや、別に気にしなくていいぞ……気になったことがあるんだが聞いてもいいか？ジャンヌ」

ジャンヌ「ええ、なんなりと」

八幡「俺にはその言っていた使命みたいなのが付けられてないみたいだがなにかおかしいのか？」

ジャンヌ「別におかしいわけではないですよ、私になった時は不完

全だったので規則で縛るしか残る方法はなかったの……」

八幡「俺の場合だと安全？な状態でやったから特に問題はなかったってことだな」

ハルア「はい、魔力の乱れは一切なかったので平気です」

八幡「そうか……それよりまず傍観者の能力はなんだ？」

ジャンヌ「人を助ける時の力の補正と異変が起きた時の察知です」

八幡「デメリットは？」

ジャンヌ「それはいいですよ、あんなのは私の時だけでいいんです」

八幡「了解、把握できた」

ジャンヌ「そういえば……主様、なんとお呼びしたら……」

八幡「主様はやめてくれ……そうだな……適当に呼んでくれ」

ジャンヌ「では八幡と呼びますね」

八幡「お、おう……それじゃ俺は寝るから……」

アナスタシア「あ、うん……おやすみ」

アナが部屋を出ていった

八幡「あの……なんでお二人は出ていかないのでしょうか？」

ハルア「主の近くに居るのは魔道書として当然です」

ジャンヌ「そうです、武装として当然です」

うん、なんとなくそう返ってくるって八幡分かった

八幡「分かった、なら魔道書と武装に戻りなさいマスター命令です」

美女2人に見られながら寝るなんてできない

お願いだから早く

ジャンヌ&ハルア「了解しました」

二人とも元に戻った

ちやんと聞いてくれる子達で良かった……

八幡「おやすみ」

ジャンヌ&ハルア「おやすみなさい」

はあ……ビブリア学園の方から変な感じする、絶対傍観者の能力で分かったなこれ……

これから
帰ってきてこれかよ…

そして翌日

アカーシヤ学園校門前で

アナスタシア「それじゃ、またね」

アナが見送りに来てくれている

アーシヤは仕事でお袋は任務らしい

八幡「おう、また今度、お袋によろしく頼む」

アナスタシア「任せて」

八幡「それじゃ」

そして今、ビブリア学園の方から不穏な空気が流れている

だから俺は今走っている

八幡「おい、ハルア、ビブリア学園までこのままだとどんぐらいで着く！」

ハルア「約1時間です！」

八幡「身体強化したらどうだ！」

ハルア「10分で着くかと！」

八幡「OK……・サクリファイス！」

落ちていた石を拾い、詠唱をして足に最大限身体強化をして急ぐ

約10分後

八幡「は？なんだこりや……」

ビブリア学園敷地内に入ると学園内はボロボロになっていた

八幡「あそこに学園長いる…聞いてみるか…」

学園長の隣に誰かいるがまあ無視しよう

八幡「おい、エロメガネ、状況報告」

ビブリア「うおっ!?八幡君?!」

八幡「これはどうなってるんだ？」

???「これこれ小僧、そう急かすでない」

八幡「ん？あんた誰？」

ビブリア「紹介しよう、彼女は元リベル学園長、マスター・リベル
リベル「そうじゃ！妾は偉いのじゃ！」

何このロリっ子…いや、元学園長なんだよな？

八幡「もしかして歳は——」

リベル「おっと、美少女に年齢の話は禁物じゃぞ」

合法ロリね……

ビブリア「それにしても八幡君、君はなんでこんなタイミングのい
い時に帰ってこれたんだ？しかもその旗は何かな？」

八幡「あんな戦いしてるのに聞いてくるとか呑気だな……よし、出
てこい」

ジャンヌ「急に出されても困ります……コホン——私はジャン
ヌ・ダルク、そうですね…・導きの旗、ジャンヌ…・八幡の武装とで
も名乗っておきましょう」

旗から人型になりジャンヌが名乗った

リベル「ジャンヌ・ダルクじゃと…？」

ビブリア「いやいや…君は本当に規格外な事をするナ、まあそ
れが面白いところでもあるんだけどネ」

リベル「お、おい…マスター・ビブリア、こいつは何者じゃ？」

ビブリア「さあ？僕にもよく分からないさ、ただ大物になるだろう
ね、大物の息子でもあるんだからネ」

もしかして本当に有名なのかお袋…

リベル「誰の息子なんじゃ…？」

ビブリア「ほら、龍殺しだよ龍殺し」

リベル「あやつか！あやつの子とはお主おつかないのく…」

八幡「ま、そういうこつた、詳しく説明すんのめんどいからまた今
度な…よし、戻っていいぞ」

ジャンヌ「はい」

旗にジャンヌが戻る

八幡「それで？この状況は？」

ビブリア「大魔公の僕達が戦ったらそれこそ世界の崩壊の危機で

しよー?」

確かにそうかもな

八幡「なるほど、じゃあ俺はあれ邪魔しちゃっていいのか?」

ビブリア「できれば邪魔しないで欲しかったりするかも」

八幡「それはなぜ?」

ビブリア「君魔力隠してるんでしょ?それも枢機クラス…だからそれを使いこなしてるであろう君には戦って欲しくないんだよ、学園治すの大変になっちゃおうしね」

八幡「…バレてたのかよ…分かった、見学してる」

そう、その事が分かったのはアラタ達に会う前の魔力の大元に向かう途中で

ハルア『八幡様』

八幡『なんだ?』

ハルア『私と契約してから魔力が漏れだしています、これはきつと枢機クラスですね……バレると色々危険なので私が隠しておきましようか?』

八幡『まじで?なんかヤバそうだから頼む』

こんな事があつた

その時何も知らなかったから軽くてもしやうがないよな?

とか考えてると

アラタ「何をっ…!!?」

リベル「我々、福音探求会はこのまま魔王の対抗存在——この娘を失うわけしないかないのでな」

アラタ「…聖はまだ死なないってことだな?」

リベル「そういう事じゃ、お主を仕留める我らの切り札じゃからな」
アラタ「なら聖をよろしく頼んだぜ、俺が必ず助けに行くからなっ
!!」

リベル「ふっ…くっ…ははははは!!!自らを殺すかもしれん女を助けに行くとは…良いじゃろう、対魔王兵器としてきちんと完成させてお

いてやる」

すげえ！転移した！

八幡「ういしょっと…」

壊れた屋根から降りる

アラタ「八幡じゃねえか！帰ってきてたのか！」

八幡「おう、ついさっきな…まさかこんなことになってたとはビックリした」

アラタ「いやー、俺もついさっき帰ってきていきなり戦うことになつて戦つてた」

八幡「軽いなおい…」

??? 「アラタくん、その人だあれ？」

アラタ「あー、リーゼは知らないのか…こいつはリーゼがと戻つてくる前に旅に出て戻ってきた比企谷八幡だ、そして八幡、このエロそうなのがトリニティセブンの怠惰の」

おい、エロそうなのって…

リーゼ「リーゼロックテ||シャルロックよ、よろしく」

うん、確かにエロいな

八幡「おう、よろしく頼む…ん？シャルロック？二人いんのか？」

リーゼ「双子よ双子、私は姉なの」

八幡「ほーん、シャルロック姉か」

リーゼ「長いからリーゼでいいわよ」

八幡「そうか？了解した」

そんなこんなで怠惰のトリニティセブンと面識がとれて後日

アキオ「おーい、いるかー？」

どうやら休ませてくれないらしい

八幡「なんだ朝っぱらから…」

だるそうにドアを開ける…実際動きたくない

アキオ「そんな嫌そうな顔しないでくれよ、学園長からの依頼だ、調査任務だとき」

あのエロメガネ…、絶対楽しんでん

八幡「あー、行けばいいんだろ？ついてくだけでいいだろうし…」
アキオ「まあ実際そんな感じだ、よし行こうぜ」

そして外に出る

あれ？なんか見た顔だなー…うん、気にしない

アキオ「どうしたんだルীগ、八幡のことじつと見て」

ルীগ「当機、この人と以前会ったことがあります」

アキオ「いつあったんだ？」

ルীগ「お宝を盗みに行った時にたまたま会い協力したのですが、すぐ別行動になり全く話してませんがその時の人ですよね？」

八幡「おう、よく分かったな…覚えられてないと思ってた」

アキオ「すごい偶然だなー、てか兄ちゃん盗みなんてしてたのか…」

八幡「いいや違うぞ！俺は写本回収のためにだな…いや、確かにやった事は盗みだな」

ルীগ「すんなり認めるんですね、当機驚きです」

そんな会話をしているとアラタと浅見が来た

アラタ「…えーつと…おおっ、ほどほどの大きさと意外と柔らかかったルীগって奴か」

ルীগ「魔王候補にまさかの覚えられ方で当機驚きを隠せません」

こいつあれなのか？ラツキースケベ属性さんか？

リリース「今回の任務はルীগさんに来てもらうことになっていま
す」

アキオ「あとは私もついていくぞー、今回の行き先は魔王候補関係
の場所で私の故郷なんだ」

アラタ「へー、そーいやお前らの故郷とかどこの人なのかとか何も
知らないな」

リリース「アラタはそういうのホント気にしないですもんね」

ふあー…眠い、昨日学園長にワープ装置治すの手伝わされたから眠
い

早く終わらせてさっさと寝たい

どうやらルীগは福音探求会のメンバーでこの前の戦いでマス
ター・リベルに置いてかれてつかまつたらしい

そして首についてる拘束具でルーグの魔力を抑えているとか
そんな事を考えていると視線感じるな

八幡「……なんだ？」

全員俺を見ていた、そしてため息をついた

それ失礼だろ

八幡「ああ……俺は多分学園長に面白半分で任務につかされた、それだけだ」

リリス「確かに学園長ならやりかねませんね……」

アラタ「お前可哀想だな……」

八幡「ほんとだわ！働きたくなんかないのにな」

アラタ「で、具体的にどんな所に向かうんだ？アキオの故郷って
言ってなかったっけ？」

アキオ「ああ、私の故郷は———こんな場所さ」
転移した

来たことあるんだよな———この更地

アラタ「着くの早っ!!いや……何もないじゃない———こ、この景色は……あの時の……あの時視えた光景がアキオの小さい頃の故郷だったんだな」

アキオ「なんだそんなの視えてたのか？愛らしい可愛い子だったろう？」

あの時のって事はなんかあったんだろうな

てか思ってたんだがここ最近の俺の日々って濃くないか？魔道士になってから

そんな馬鹿な事を考えてたら

リリス「上空よりかなりの高エネルギー反応がっ……!!」

アキオ「まずいつアレが来る———にーちゃん!!!そいつを上
ぶっ放せ！」

あ、いつの間に銃作ってたのね

アラタ「お、おうっわかった!!……メテオドラグナー!!!」

アキオ「くっ……この力は……!!」

はあ…やっぱりか
そんなこんなで天空図書館に来ました

ねえ…？なんでそんなに働かせるの？

やっぱ、何も考えてないじゃん
策無しでとか無謀すぎ！

そんな事を考えてたら

アキオ「いやあーちよいと防御に本気出しちゃった」
ちっ…ちやいだと!?

アラタ「…ちつちやくなつたつていやいやいやいやつ!!本気出すと
ちつちやくなるとかどういいうことだよ!」

アキオ「んー…暴食の魔力を使いすぎて腹減りハングリーモード
みたいな?」

八幡「結構適当なんだな」
ん?そういえばルーグはどこだ?

ハルア「上空から魔力反応、魔力弾が飛んできます」
ハルアがいきなり言ってきた…先に言え!

八幡「・サクリファイス!!」
地面に落ちていた瓦礫を拾いそれを魔術の用途にして手にその魔
力を込めて魔力弾を殴り打ち消す

八幡「急だなおい、俺を働かせてくれちゃって…何してくれんだよ
!」

アキオ「兄ちゃんそんな凄いことしといて案外楽そうだな…!——
——て、ルーグは早速裏切り…ってなーんか操られてるっぽいな」

どうやら魔力弾を飛ばしてきたのはルーグらしい
つとその前に言わなきゃな

八幡「おい!その水晶魔王因子に反応してるぞっ!」

アラタ「じゃあオレが引きつける!八幡とリリースとアキオであの水
晶を何とかしてくれ!!」

そしてアラタが離れて

アラタ「おーい!!さあこつちに魔王候補がいるぞー!!」

アラタの方に撃つと思つたら…:…は!?

アラタ「リリース!!!」

浅見が撃たれた

そしてルীগを操っている水晶を不動が壊した

アラタ「リリース!!!リリース……リリース!!!」

ソラ「コイツはやばそうだな……イリア!早く治療だ」

イリア「はい!!」

今まで出てきてなかった2人だが説明しよう

ソラの方はアステイルの写本、イリアと呼ばれた方はイーリアス断

章

実は昨日終わったあと一通り自己紹介した

こんなことしてる場合じゃねえ!

アラタ「魔王因子を狙うんじゃないのか!?!」

ルীগ「……そのとおりです」

八幡「……って事は浅見も魔王因子を持ってるってことだな」

アラタ「魔王因子がリリースに……!?!」

イリア「とりあえず今すぐ命には別状はないみたいですが魔力がとでも乱されていて危険ですっ!!」

ソラ「……どうやらリリースの中の魔王因子がショックで目覚めつつあるってことだな」

アラタ「魔王因子が目覚める……」

イリア「とりあえず治療には時間が必要です、どこかに隠れませんかっ!」

アキオ「そうだな!あっちの廃屋にとりあえず隠れようぜ!」

イリア「何とか魔王因子を解くのに成功です……」

ソラ「お疲れさん、後は私が見てるから魔道書になって休んでるといいぜ」

イリア「……ちよっぴり悔しいけどそうさせてもらいます」

アキオ「今のところセキュリティの連中は大人しく飛び回ってくれ

てるみたいだな」

まあそうだな…正直壊そうと思えば壊せそうだがめんどい

ルーグ「不覚です…当機としたことがあっさり操られるとは…」

アラタ「それでソラ、リリスの中に魔王因子があるっていうのは本当なのか？」

ソラ「本当さ…むしろさっきのやつのでめちやくちやな目覚め方させられたっぽいけどな…：突如目覚めた魔王因子はおそらくリリスの中でずっと眠っていたものだろう…それが——こないだの聖を倒す時にマスターの魔王因子と繋がることで目覚めやすくなつてたんだ、そして今回魔力だけを的確に射抜く攻撃の直撃を受けたことで活性化した」

流石伝説の魔道書さん、説明が上手い

アキオ「魔力つてのは存在の力だからな、乱れたり消えそうになつたりすると当人の命が危なくなるってことさ」

これは勉強済みだな、よし八幡えらい

ソラ「イリアが何とかそいつを解して今は問題なく正常に流れているみたいだな、その胸のタリスマンのおかげだったっぽいぜ」

アラタ「イリアのおかげと…あの時のプレゼントが早速役立つのか」

ソラ「予備電源的な役割を果たしたらしい」
ん？プレゼント？

八幡「おい、プレゼントってなんだよ」

アラタ「この前リリスと出掛けた時にな、もしかして八幡も欲しかったのか？」

八幡「ちげえよ、あの転移装置治してる間にそんな休み期間あったなんてな…：…」

俺働きすぎだろ、もう今回出番なくて良くないか？

アラタ「…：…なんかすまん」

そんな憐れみの目を向けるな！やめてくれ！

アキオ「どつちにしろ…ここのままってわけにはいかないみたいだぜ？」

ルーグ「リリスさんがこの調子ではアラタさんが蜂の巣になるのは火を見るより明らかです、彼らも「みんなー!!ご馳走がまた来たよー!!」ってご満悦になってるに違いありません!」

アラタ「アイツらあんなナリなのに結構ノリノリなんだな」

アラタ「むしろ俺が囷になってる隙になんとかりリスとイリアだけでもここから出せれば」

アキオ「魔道昇降機——地上へのエレベーターはこの遺跡群の中央にある城の中だけだ」

ほえー、よくそんなん知ってんな

ルーグ「おや…その通りですそこが唯一の脱出口です、詳しいですね?…ああなるほど、貴方は秘宝巫女の一族なのですな」

アラタ&八幡「秘宝巫女?」

ルーグ「はい、もんの凄いお宝が封印されている遺跡や古城を賊から守る一族です」

アキオ「——だったという話だな

今はもう魔道士だし…私が秘宝巫女として担当する遺跡が正にここだったのさ、だけど…ここにあった兵器は…私がいた街ごと私以外の人々を消滅させちゃった、だからこの下には荒野しか広がってないのさ」

ほーん、結構なことがあったのか

まあ今はさっさとこの状況をどうにかしなきゃな

ルーグ「話の途中割り込んですみませんがそろそろ彼らどこでも巡回ビーム君エクスペンシヴがかなり近くまで来ているのですが」

アラタ「いや名前変わってるだろ」

アキオ「なあ、あれ壊せるやつならいるんじゃないか?」

まじで?不動とか?ルーグもいけそうだな

ジー

おい、今にも擬音がなりそうなら見てくるな

八幡「え?俺?」

アキオ「八幡ならできるんじゃないのか?さつき魔力手で打ち消し

てたし」

アラタ「あー、あれ凄かったよな…今思えばすげー事なんじゃねえのか？」

ソラ「…確かにな、私の全く知らない術式だったり詠唱だったりちと謎だな…その旗もな」

ルーグ「当機もとても気になります」

働きたくないんだが…

八幡「とりあえずその話は今度つて事でアレ壊してくればいいのか？」

アラタ「おう、頼む！」

八幡「・サクリファイス・」

予備に用意していた持ってきた袋の中にある石を手に取り詠唱をし足に魔力をその石分全て込めて壊しに行く

比企谷八幡 side out

春日アラタ side

八幡「・サクリファイス・」

八幡がそう詠唱すると一瞬で消えた

アラタ「なんだありや」

ソラ「凄いな、もう自分の力の使い方をこの期間でモノにしてるな…一体どんな修行したんだ？」

アラタ「すげえのか？」

ソラ「ああ…そもそもあのテーマを研究してるやつを見たことがない、それなのにあの成長速度…なんかあるのか？」

春日アラタ side out

比企谷八幡 side

八幡「つと、疲れた」

アラタ「お、速いな」

八幡「いや、少し遅れちゃった、水晶全部壊してたら」

アラタ「まじか…そりゃ助かる」

八幡「おう、さっさと行こうぜ」

ルীগ「当機、出番がないので何か欲しいのですが…」
アラタ「じゃあ護衛とかやってもらおうか？」

ルীগ「それならこの拘束具を解いてください」

ソラ「リリースの持つてる鍵は確かこのへんに…あつたぜマスター」
おいおい、伝説の魔道書さん…人の服からそんな簡単に取っちゃうんですか

アラタ「よしっ」

ルীগの拘束具を解いた

ルীগ「というわけで——ここであっさりやつつけられてしま
いなさい、真の魔王候補!!」

ほーら、裏切る…いやなんも思ってたとかじゃないよ？

ハチマンウソツカナイ

パシヤツ

ん？不動がなんかやったぞ？

ルীগ「ぐっ…んっ…こ…これはっ!？」

リーゼ「やれやれ——嫌な予感がしたからアキオに持ってきてお
いてもらってホントに良かったわ」

どうやら束縛だっけ？されたらしい

アラタ「リーゼ!？うん…？今度はリーゼがカメラの中にいるのか
？」

リーゼ「セリナに頼んであたしを撮影してもらったのよ、あの子ホ
ントにちゃんと束縛の力上げてるのね」

ほえー、すごいな

ルীগ「ふああ…やっ…これはっ…んんっ…」

うん、エロいな

リーゼ「無理して魔力とかで振りほどこうとすると余計に食い込む
わよ？あたしがここにいる限りいつでも出来るんだからね？」

ルীগ「…まっ…マジですか……んう…きつい…当機このままだと
…エッチな魔王候補の手籠めにされてエロ担当になってしまいます
…」

やばい、なんか可哀想になってきた

アラタ「……なるほどな」

何を言うんだ？

アラタ「つまり！エロいことになりたくなければ言うことを聞くのだっ!!」

アキオ「…最低の脅しだな」ソラ「マスターらしいがな」八幡「うわあ……」

ルーグ「いいで…しょう…当機…それはもう従順になりますので…んっ…」

アラタ「よーしリーゼ解いてみてくれ」

解かれたな

ルーグ「ふふふー、またも引つかりましたねー」

アラタ「アキオ」

アキオ「おうともさ」

も、もうやめてやれ…みてられない…

そして数分

ルーグ「魔王が鬼畜すぎて当機ビツクリしました…」

アラタ「…随分色っぽいなあ、というわけで護衛や露払いは任せ
たっ」

ルーグ「…人使いの荒さとかまさに魔王ですね」

アラタ「よしっ、そんじゃあの城の中に行って下への出口を探そう」と言った瞬間めっちゃ天気が悪くなった……は？

アラタ「なんだ…？急に空気が…」

アラタ「なんなんだ!?何が起きているソラ!?」

ソラ「マスター!!ヤバイやつが接近してきてやがる」

ルーグ「こっ…この気配は魔王因子…!?!」

アキオ「封印から出てきやがったか!?!」

そこにはドラゴンとそのドラゴンの上に乗っているローブの人がいた

そして

アラタ「なっ…!?!リリース!!」

浅見が一瞬でローブの手元に

は!?! どうやった!?!

そしてローブの男が喋りだす

??? 「我が名はアビス・トリニテイ色欲の「魔王」にして「紅の魔王」我が娘——リリス・アザゼルを取り戻しに来た」